



270号  
新宿発

# テロと日本の危機 I

新崎盛暉／井上澄夫／大石まゆみ／奥平康弘  
斎藤千代／酒井啓子／竹信三恵子／目取真俊

チエチエン・アフガン・米国  
テロの真相を考える 寺沢潤也

---

報復戦争への加担は憲法改悪に直結する 奥平康弘 .....	1
報復の連鎖を断ち切る英知を 酒井啓子 .....	2
親米派の対米恐怖 新崎盛暉 .....	4
ブッシュの報復戦争と小泉の戦争協力を阻止しよう 井上澄夫 .....	7
「掲げる旗」は 憲法九条 斎藤千代 .....	11
喪失感の中のアメリカ人 大石まゆみ .....	15
チェチェン・アフガン・USA	
——テロの真相を考える 寺沢潤世 .....	19
読者の声 アメリカの「テロ報復戦争」日本の自衛隊派遣に反対する！ .....	40
資料 テロ対策特別措置法案——自衛隊役務の提供 .....	47

---

■沖縄から 沖縄もテロの標的に 目取真 俊 .....	48
■めじゃーなりすとのめ マスメディアと個人の揺らぎの間に 竹信三恵子 .....	50
■語りかけたいあなたへ ダイエット 大里知子 .....	52
■TOPICS DV防止法施行/ テロ対策特別措置法に強い反発/ またしても沖縄が他 .....	54
■集会から 第47回日本母親大会/VAWW-NETジャパン「NHK裁判報告会」他 .....	58
■あごら読書室 石田雄『権力状況の中の人間』/ 奥平康弘『いかそう日本国憲法』 長倉洋海『フォト・ジャーナリストの眼』 .....	60
■あごらのあごら .....	62

# 報復戦争への加担は憲法改悪に直結する

奥平 康弘

まぎれもなく非人道的で反民主的な、あの「テロ事件」に向けて、米国の人びとがテンパーを一気に高め、「軍事報復」を叫ぶのは、ある意味でわかる。けれどもブッシュ政府がヒステリー気味の大衆世論を背景に、武力行使を選択することには、なんとしても反対だ。

「反対」の意味はいろいろある。そのひとつは米国の「報復戦争」は、テロ撲滅対策という課題に有効適切とはいえないということがある。それとは別に憲法研究者としてばくが憂慮するのは、米国の、軍事に突出した報復措置が日本国に及ぼす悪影響である。米国軍事筋は今度の事件を契機に、しきりと日本政府に対米協力の「顔を見せろ、国旗を掲げろ」とブレッツシャーをかけている。そして小泉政権は、それに応じて、軍事に比重を置いた協力体制の立案で実績をかせこうとしている。その道がますます深く憲法九条の持つ意義の抹殺に通じるのは明らかである。

米国は前世紀の終りごろからずっと対米軍事協力の拡大強化を盛んに要請してきた。こうして日米安保見直し、周辺事態法の制定という具合に、米軍事戦略システムへの組み込みが行われてきている。この動きは結局において、集団的自衛権に関する憲法上の制約を実質上無きものとする方向に働く。世紀かわりめあたりから米国は、一段と集団的自衛権の承認を日本にせまっている。「個別的自衛権に固執するのはナンセンスだ。あれは単なる政策的な裁量で選択したにすぎないのだから。集団的自衛権の選択替えは、簡単ではないか」と居丈高でさえある。もちろん、日本国内には自前の軍事拡大強化をねらう政治勢力がはびこっている。かれらは日米協力をダシにして、集団的自衛権→憲法改正をすすめる取ろうと虎視たんたんである。

日本に固有なこうした背景、こうした特別な脈絡をもって、いま日本国は在る。この国の政府がここで、米国軍事主導の「報復戦争」に易々として乗り、ますます憲法を無きものとするのを、指をくわえて見ているわけにはゆかないではないか。

(憲法学者)

# 報復の連鎖を断ち切る英知を

酒井 啓子

九月十一日以降、私たちの眼に見える景色は一変してしまった。

ツインタワーがなくなってしまうた視覚的景色のことを言っているのではない。欧米では髭をはやしターバンを巻いた肌の色の浅黒い者を見ると反射的にテロリストかと怯え、中東出身者、イスラーム教徒はいつ何時<sup>なんど</sup>テロリスト扱いされて迫害を受けるかと戦々恐々としている。実際事件後、多くの欧米在住の中東出身者は飛行機への搭乗を拒否され、航空券や招聘状を持つているにも関わらず、何日も空港で足止めをくらったという話を頻繁に聞く。殴られた者、撃たれた者も後を絶たない。

米国で起きたことは未曾有の悲劇であることは確かであるが、今、さらに危険なことは、こうした人種主義的偏見——宗教であれ見た目であれ——が、あたかも当たり前のように、急速に我々の社会に蔓延し始めていることである。テロ犯人を突き止め、相応の処分が課されることは当たり前であるが、それを何故、無条件に「イスラーム」の本質そのものと繋げて考えるのか、その回路の短絡さ自体が、恐ろしい。一九世紀の植民地の時代に、西欧諸国はこぞってイスラームの「後進性」や「狂信性」をあげつらい、だからこそあの地域（中東や南アジア、中央アジアなど）は、西欧の支配のもとに「開明」されなければならないのだ、という傲慢を以って世界を続けた。それを否定し克服

していく営みが二〇世紀だったのではないのか。となれば、二一世紀は、十九世紀に遡っていく過程なのか。

そう考えれば、パレスチナ問題が未解決なままで二一世紀を迎えたことの深刻さが改めて浮き彫りになるだろう。第一次大戦という十九世紀の矛盾の頂点にあつて、西欧は西欧社会が排除し続けてきたユダヤ社会に、自らの責任の及ばない中東という地域への脱出口を示した。しかしそうして生まれたイスラエルは、パレスチナ人を追い出し、さらなる差別と排除の構造を成立させたのだ。しかしヒトラーに迫害されたユダヤ人の姿は西欧社会のトラウマであつても、パレスチナ人やその他イスラーム世界における惨劇には、欧米は目を開かない。今回のテロの背後で、多くの人の命が日常的に奪われている中東の現場こそが、イスラーム世界にとつては未曾有の惨劇なのだという事実を、無視する。

必ずしも抑圧され鬱屈したイスラームの民がすべて、極端な行動を取るわけでは、決してない。しかしそうした行動を生み出す背景に対して、欧米社会はあまりにも無関心であつた。と同時に、最も親米国でありながら最も封建的、非民主的であるサウディアラビア出身者の「反乱」であるということの持つ意味は、重要である。「民主主義」の推奨者であるということと、石油があるからというだけで、どんな「非民主的」な国であつても支援するという、米国の矛盾。

事件直前まで南アフリカのダーバンで開催されていた反差別人権会議には、イスラエルと米国が異議を申し立てて欠席した。そもそも米国の言う人権とは何か。報復攻撃が予想されるアフガニスタンでは難民が流出し、六〇〇万人が飢えていると伝えられる。アフガニスタン内戦をなんとか治めて政権についたタリーバーンは、内戦期にパキスタン国境に逃れた難民の神学生たちが、内戦下

の混乱状況のなかで自衛手段を取らざるを得なかったことから、武装していった人たちの集団だ。新たな難民の困窮する場。そこそがテロリスト再生産の場にならないと、誰に言えるだろうか。

(アジア経済研究所 地域研究第二部)

## 親米派の対米恐怖

新崎 盛暉

「親米一筋小泉外交」という見出しの朝日新聞の記事（七月一九日）によると、六月三〇日の日米首脳会談で、小泉純一郎首相は、次のような発言をしている。

「米国が正義と寛大さをもって日本に接したことが日本人の親米感の根底にある」

また、「戦争に負けて日本は米国の奴隷になるかと考えていた。しかし米国が寛大に接し、食料も提供してくれたため、米国が日本を旧日本軍から解放したとする気持ちが強い」と強調したともいう。

後段の発言などは、敗戦直後、一九四〇年代の日本共産党や沖縄人民党の「解放軍規定」を思い出してしまふ。しかしここでは、そうした気持ちと、A級戦犯とともに旧日本軍戦没者を祀る靖国神社参拝にかける情熱は、どのような整合性をもつのだろうか、などと場当たりの発言の揚げ足をとりうというわけではない。とりあえずここで問題にしたいのは、歯の浮くような親米発言の根底に本当にアメリカへの信頼感があるのか、むしろ彼ら親米派の心中には、根強い対米恐怖心があるのではあるまいか、

ということなのである。

実は、日米同盟の維持・強化を主張する親米派の発言の中から、対米恐怖感とでもいうべきものを拾い出すのは、さして難しいことではない。たとえば、八月三日付の沖繩タイムス（共同配信らしく六日の琉球新報にも同一記事が掲載されている）に、平岡敬前広島市長のインタビュー記事が掲載されている。その中で平岡前市長は、次のように証言している。

「四年前、広島市長時代に八月六日の平和記念式典で読み上げた平和宣言の中で、日本政府に対して核の傘に頼らない安全保障体制の構築を要求しました。橋本龍太郎首相（当時）は、式典終了後、『できっこない。市長はアメリカの怖さを知らない』と言っていました」と。

「アメリカの核の傘に、しっかりと守られていながら、いわゆる非核三原則を唱えることの矛盾」については、繰り返し指摘されてきている。しかし実際は、「アメリカの核の傘にしっかりと守られている」のではなく、「がっちり縛り付けられていて、そこから抜け出すことを許されていない」のである。

自民党内の派閥の位置や政治手法が小泉純一郎の対極に位置づけられているとはいえず、「日米安保共同宣言」当時の首相であつた橋本龍太郎もまた、小泉に劣らぬ親米派である。彼らの親米的姿勢の根底には、対米不信、さらには対米恐怖がある。こうした観点からみれば、小泉が「戦争に負けて日本が米国の奴隷になるかも知れない」と考えたというのも、納得がいく。アメリカが戦争目的に掲げた「自由と民主主義を守る戦争」というたてまえの欺瞞性を見抜いていたともいえるだろう。

もう一つ、別の例として、最近、右翼ジャーナリズムの寵児となつた観のある志方俊之元陸上自衛隊北部方面総監の発言を引用しておこう。「日本人とコソボ紛争」という共同通信配信の特集記事（沖

縄タイムス一九九九年八月二九日）のやりとりの中で、志方は次のようにいう。

「北大西洋条約機構（NATO）の東方拡大への歴史が動き始めたとき、旧ユーゴ連邦はじやまになり、クロアチアなどの構成国を独立させた。そしてコソボ。『これ以上（連邦分裂は）嫌だ』というセルビア人の気持ちはわかる」

——NATOは「人道介入」としてユーゴを爆撃したが。

「六〇〇年間住み続けたアルバニア系住民を追い出すのはけしからんというのが欧米の論法だが、逆に紛争に火が付いて残虐行為が拡大した。一方で、イスラエルが二千年間暮らしてきたパレスチナ人を追い出すのは黙認しており、ダブルスタンダードだ」

——日本周辺で米国の「人道介入」が行われる可能性は。

「欧州と中東が落ち着いたら、やるだろう。日本にとって死活的なのは、原油輸入ルートが走るインドネシアと南沙諸島だ。米第七艦隊が活動しやすいようにガイドライン（日米協力のための新指針）があるが、国連平和維持活動（PKO）以外で自衛隊が出ていけないのでは困る。集団安保は違憲ではないとの解釈を確立しなければならない」

——米国の行動をたしなめる必要もあるのでは。

「たしなめるには、上の立場でなければならぬ。日本には米CNNテレビに対抗できる情報発信力があるだろうか。米国は三ヶ月くらいで日本を敵に仕立てることもできる」

志方は、「人道的介入」の欺瞞性も、NATOの軍事行動の意図も的確に認識している。その上で、あくまで強者に追従し、強者との共同行動を強化することによって、利益のおこぼれを得ようというのである。その根底には、対米恐怖心がある。



志方ほど露骨に「毒をくらわば皿まで」の論理を展開する親米派は少ない。しかし、ほとんどの親米派が、粉飾された自らの建て前論の根底に対米恐怖心と、弱肉強食の論理と、利己的利益追求主義が潜んでいることを、多かれ少なかれ、自覚しているに違いない。

異なった文化・価値観・制度の平和的共存の上に正義を実現することの途遠きを想わずにはいられない。

『けーし』風編集代表)『けーし風』第三号(二〇〇一年九月)より

## ブツシユの報復戦争と 小泉の戦争協力を阻止しよう

井上 澄夫

米国で九月十一日、すさまじい惨事が起きたことを、テレビで知った。友人が電話してきて、「知っていますか」と問うので、「ウン、知っているよ」と答えたが、「あまり驚いてないようですね」と言うので、「こういうことが必ず起きると思っていたんだよ」と応じた。

実際、そう思っていたのだ。米英両政府は、湾岸戦争後、イラクの上空に「飛行禁止区域」なるものを勝手に設定し、そこで警戒にあたる米軍機をイラクがレーダーで追跡したなどという理屈をつけて、イラクに対する無差別の空爆を長期にわたって繰り返してきた。また米政府は、その気になれば止めさせることができるはずの、イスラエル軍によるパレスチナ住民の殺傷を、あえて放置

してきた……。

こんなことをやっていて、反撃されないわけではない、必ずなにかが起きる、と沈んだ気持ちで確信していたのだ。

私はテロを容認しない。民間機を乗っ取って、乗客もろともビルに突っ込むような行為は、断じて許さない。だが、原因のない結果はないのだ。九月十三日付『沖縄タイムス』の社説は、「この社会のさまざまな矛盾や課題を無差別テロによって解決しようとする考え方に対して、断固反対する」と表明しながら、こうのべている。

「事件発生に対し、パレスチナ自治区の住民から歓声の声が上がった。／一方では、無辜（むこ）の住民が惨事に遭って叫び、逃げ惑い、もう一方では、無事の住民が車のクラクションを鳴らし、喜びにわく。／この対照的な光景は、痛ましい。なぜ、そうなったのかを冷静に問うことなしに、有効なテロ対策はできない。／テロをなくしていくためにも、歓声を上げて事件を歓迎したパレスチナ住民の声に耳を傾ける必要がある。」

アジア太平洋戦争の最末期、広島に原爆が投下されたとき、日本の植民地、あるいは侵略されて日本の軍政下にあった国々で、今回と同様、歓喜の声が上がった。米政府は、戦後世界で予想されるソ連の台頭を牽制するために、広島と長崎にあえて原爆を投下した。だが、人類史上最悪のケースと言える、この非戦闘員の無差別の大量殺戮を、心から歓迎した人びとがいたのだ。この事態を、当時の大日本帝国臣民は、非難できただろうか。「歓声を上げて事件を歓迎した住民の声に耳を傾ける必要」は、当時もあったし、今もある。

今回の事態を「二一世紀のパールハーバー」と呼ぶ人びとが、米国ににいるという。そういう人びと

には、真珠灣奇襲に対する報復が、ついにはヒロシマ・ナガサキに発展した事実を、心を静めて想起することを求めたい。

この国のマスメディアは、ブッシュ大統領による開戦の時期や報復戦争の戦術の予想のみを伝え、戦争拡大の行き着く先を読者に考えさせない。戦前と戦中、「聖戦完遂」を煽りに煽りながら、戦後、一言の反省も表明せず、「民主主義」を称え始めた、あの無責任きわまる醜態が再現しているのだ。

私はテロに反対であるが、報復戦争にも反対だ。テロとは、政治的な目的を持つ暴力の行使だが、戦争こそ最大の「政治的な目的を持つ暴力の行使」、最悪の「国家テロ」ではないか。

戦後、米政府がやってきた戦争を、とりあえず思い出してみよう。朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争。さらには、グレナダやパナマへの侵攻……などなど。戦後世界で最も悪質な「テロリスト国家」、「ならずもの国家」は、米国である。

米国政府が今、これまでの数々の戦争犯罪について全面的に謝罪し、すべての被害者に十分な補償を行なうなら、ブッシュ政権は、とりあえず今回のテロを糾弾する道義的根拠を獲得するだろう。しかし同政権は、市場原理のグローバル化を強行して、貧しい人々を飢餓に追い詰め、冷戦終結後、やつと芽生えかけた世界各地での地域強調の努力を、ユニラテラリズム（単独行動主義、一国超大国主義）で破壊することを国是としている。過去の過ちを反省せぬどころか、テロへの報復戦争の発動を宣言しているのだ。その姿勢にどこに道義性があるだろうか。

報復の連鎖が《戦争の世界化》を招く事態を阻まねばならない。だが私たちが直視すべきは、ブッシュ政権とともに、小泉政権の動きだ。小泉首相らは、ブッシュの報復戦争を支持（一）しつつ、ここぞ好機とばかり、「領域警備」を可能にする自衛隊法の改悪、集団的自衛権行使を合憲とする憲

法解釈の変更、有事法制の整備など、「戦争国家」化を一気に加速する気だ。

だが希望はある。かの大惨事の九日前、イスラエルでは、高校生六二人が、パレスチナ住民への人権侵害に抗議して、シャロン首相に兵役拒否を通告した。なんと気高い勇気の発露であることが。同時多発テロ発生の三日後、米下院では、バーバラ・リーという女性議員が、ブッシュ大統領に武力行使を認める決議に、たった一人で反対した。なんと四二〇対一だったのだ。

(文筆業)

## 「掲げる旗」は憲法九条

斎藤 千代

目を疑うような自爆のシーンを見た瞬間、戦中派世代の私の脳裏に浮かんでは神風特攻隊、そしてヒロシマだった。

自らの命を捧げてまで訴えなければならぬことを持っていた人がいた。そして実行した。その衝撃で、しばらくは口がきけなかった。

やがて、想像した以上の惨劇が明らかになる。世界貿易センター、ツインタワーには、一万人を超える人がいた。

「神風」は、戦場で、相手の戦艦に体当たりしたのだが、今回の自爆の被害を受けたのは、黙々と働く一般人であり、ハイジャックされた航空機の乗客乗員である。どんなに深い思いがあつたにせよ、も

つと別のアピールがあったはずだ。なんとむこいことをしてくれたのだろうと、残念・無念がつのる。同時に、ここまで実行者を追い込んだ背景に、どうしても思いが走る。

そういう戦中派日本人の、複雑な心情とは無縁に、テレビは連日連夜、惨劇のシーンを繰返し見せ、「報復」の必然性を吹き込む。そして、いち早く発表された犯人像。

おかしいぞ、という声があちこちで聞こえ始めた。と思う間もなく、一〇月八日、米英のアフガニスタン攻撃開始。一二日には、地下壕の特殊爆弾による破壊が報じられた。これは、湾岸戦争のリピートではないか。

\*

一〇年前の湾岸戦争。「サニタリー・ウォー（衛生的な戦争）」と米軍が名づけたピンポイント爆撃報道に、私はどうしても納得がいかなかった。そこへ「PARCが市民調査団を出すので行つて欲しい」と、ダグラス・スミスさん。思わず体が動いた。しかし、現実にはイラク入りは不可能だった。イラクは、かたくなに外国人を拒んだ。

それが可能になったのは、寺沢潤世上人のお陰だった。サウジとの国境にピーステントを張つて、人間の盾になろうとした上人が保証する人に限つて、イラク政府はビザを出し、私は現地を自分の眼で確認することができた。

米軍が撤退、変わつて内戦が始まつていたが、予期したとおり、現実とは完全に異なつていた。その詳細は一九九一年の「見えない戦争」（BOC出版）に記したが、たとえば、一見、傷ひとつないように見える建物が、内部は一物残さず焼き尽くされている。天井に小さな穴一つを残して落下した新型爆弾は、火炎流のように、瞬時にしてすべてを奪ったという。

中でも、ただ一発で全員の命を奪ったアル・アメリカナ・シエルターは、どう考えても原爆としか思えなかった。それが劣化ウランだとわかったのは、つい二三年前のことだが、報道の伝えるサニタリー・ウォー（衛生的できれいな戦争）、サージカル・ウォー（外科手術のように軍施設だけを摘除する戦争）は、攻撃する側にとっては、全く手を汚すことがなく、この上なく清潔で上品だが、撃たれた側にはこの上なく残酷で無残なものだった。

日本人の一人ひとり、赤ん坊までが一万円ずつを出して贈った一兆五〇〇〇億円は、何の罪もない他国の庶民の人殺しに使われたのだ。

あの戦争で米国と共闘した諸外国が日本をせせら笑ったのは、「血を流さなかった」からではない。いわば暴力団に、暴力団が最も必要とする「資金」を惜しみなく供出して暴挙を可能にした仕掛け人の役を、あえて引き受けた日本人の恥知らずをあざ笑ったのである。

湾岸戦争に最も貢献した国は日本。日本の貢献がなければ、不況の米国は微動だにし得なかった。しかしその貢献者は有色人種。彼らは初めから戦線で肩を組む気など、なかったのだ。

あの時、心ある日本人は、「日本は決して戦わない国。不戦の憲法を持つ国」と、当時の首相、海部さんが胸を張って拒否することを、どんなに熱望しただろう。

不戦の憲法にこめられた不戦の志を語れば、わかってもらえたはずだ。米国でも、クエーカー教徒は戦場に立たないことが認められている。そして、クエーカー教徒をあざ笑う者は、いない。

小泉さんが、もしも本場に「男の中の男」なら、海部さんが言えなかった「不戦の国ニッポン」を主張したはずだ。たとえ一国でも戦わないことを毅然として宣言する国が出れば、二一世紀は、戦争のない世紀に近づくだろう。日本の勇氣は、世界の賞賛を集めるだろう。

招かれもしないうちに米国に飛び、資金プラス派兵を手土産にした日本の今の首相の姿は、海部さんよりも、更に下品で情けない。

英国は、プロパガンダなしに、直ちに派兵した。「米国の最上の同盟国」を標榜して。「のどから手が出るほど欲しかった中央アジアが手に入った。英国は腐っても鯛です」と、寺沢上人は苦笑した。帝国主義時代以来、覇者は常に白人。有色人種は、米国の下僕ではあっても、対等平等の同盟国ではない。利権は山分けする国が少ないほどよい。湾岸戦争で多くのノウハウを得た米国の、次の標的はアフガニスタンと、恐らく早くから決まっていたのだろう。オサマ・ビン・ラディンの映像は、たちまち世界中に流れた。彼が関わったという証拠は何一つ示されないままに。

たしかに実行犯の中には、イスラーム原理主義の信奉者もいただろう。しかし、あれほど精密で非凡なテロが、彼らだけの力でできるはずがない、と、イスラーム世界をよく知る人びとは口を揃える。米国の弱点はどこか。あらゆる情報を集め、具体化する手段を繰返しシミュレーションし、現実の行動の訓練をすることのできる力と、世界屈指の戦争事業家、ビン・ラディン氏を三桁も四桁も上回るユダヤ系超富豪の結びつきは、知る人ぞ知ると言われる。一機でさえ困難なハイジャックが、四機同時に可能だったというのも常識では考えられない話だ。米国が正義の国であるなら、「報復」に走る前に、もつと慎重に、もつと綿密に、真犯人探しをしてほしかったと、残念でならない。

湾岸戦争で得たあらゆる経験とノウハウを生かしてさらに巧妙な戦闘が展開されるだろう。まるで前々からの計画であつたかのように、米国は「犯人を隠した」アフガニスタンに、電光石火の攻撃を始めた。

サニタリー・ウォー。サージカル・ウォー。

人を殺すことにひとかけらの痛みもない発想は、ニューヨーク・ワシントンテロよりも、さらに凶悪に見える。その凶悪・巨悪に、日本は、どんなにあざ笑われようと憎まれようと、決して加担してほしくない。

旗色を鮮明にせよと迫られた日本が振るべき旗があるとすれば「憲法九条」以外、あるだろうか。二〇〇〇万人のいのちと引きかえに、二〇〇〇万人のいのちをこめて生まれたこの旗こそ、二一世紀の希望の旗。首相が、政府が、国が振らないなら、私たち日本の人民ひとりひとりが腕がしびれるほど振り続けよう。この汚れた醜悪な戦争を止める力は、これ以外にはない。（『あごろ』編集部）

## あの九月十一日

大石 まゆみ

ニューヨーク、ワシントン、が被ったあのテロリストによる攻撃は、文字通り大ショックでした。

自然災害にもほとんど見舞われたことのないこのニューヨーク、マンハッタンで、こんな惨事があるとは全く信じられないことでした。私の五〇数年の人生の中で、最も身近に危険を感じた経験でした。

当日、夫のマークと私は娘の住むシャーロットを訪ねており、十一日はニューヨークに戻る日になっていました。しかも二日後の一三日には、あの攻撃。倒壊された一号館ビルの五三階へ、ある用件で行くことになっていました。なんらかの理由でその約束が早まっていたらと、今でもゾッとします。



当然飛行機はすべて取消しとなり、四日後の十五日に列車に切り替えてニューヨークに戻りました。シャーロットに在る間は、テレビを観るだけで、頭ではわかつてゐるのに、何か実感のわかない、という奇妙な感覚でした。いよいよ帰るという車中では、落ち着かない不安な気分でしたことを覚えています。

現在、グリーンカードの資格で米国に滞在していますが、遠い将来には米国籍を取得することもひとつの選択としてあるかな、と考えることもあったのですが、このニュースを聞いて反射的に思ったことのひとつは、「それはできない」ということでした。日本人でいても過去の負債があるのに、それに加えてこんな憎まれているアメリカ人になるのは荷が重すぎる、と思ったのです。

米国は軍事報復をすべきでない、と家族で話しましたが、事件直後にあって、怒りとショック状態に在るアメリカ人たちには、なかなかピンとこないようでした。不幸にも、一か月後には「報復」は現実のものとなりました。

\*

ニューヨークの駅に着いたのは真夜中過ぎでした。普段であれば、土曜日の夜は人出でいっぱいなのに、街は閑散としていて、明かりも暗く異様な感じでした。私の住むアパートは、一時、住人以外は立ち入り禁止区域になったあの境界線のすぐ南にあり、しかも、救急病院に指定されたセント・ヴァンセント病院のすぐ近くにあります。来客があると、いつも夜景見学に案内するアパートの屋上にさつそくのぼつてみると、南の方向がサーチライトに当たって、煙がまだモクモク出ていました。あんなに高く、目立っていた二つのビルが、こんなにも簡単に消えてしまったとは言葉にもなりません。疲れていましたが、マークに誘われ、すぐ近所にも出かけると、通りの角かど、特に病院の周りは、

ろうそくや尋ね人の写真で埋まっていました。

翌日、さっそくユニオン・スクエアへ行ってみました。中心にある銅像をとりかこむ形で大勢の人びとが集まっております。ろうそく、花、尋ね人の写真情報、そして思い思いのメッセージでいっぱい、胸を打たれました。ほとんどが犠牲者を悼む文章ですが、報復慎重論、反戦を訴えた文章も意外とあり、多少ホッとした思いでした。チベットの人びとがグループでお経を読んでいたのが印象的でした。

\*

その後、職場にも戻り、幸いにも犠牲になった人びとを直接には知らない私たちの生活は、一見元に戻ったようでもあります。ベットに入って眠りにつく一瞬、飛行機に乗っていた人たちの最後の気持ちはどんなだっただろう、などという思いに急に襲われたりします。ちょうど一年前の今ごろ、友だちの結婚披露宴で、世界貿易センターの最上階のレストランに行ったことが信じられません。

\*

周囲の人たちは一体何を考えているのだろうか？ テレビ、新聞は、米国国民の九六％が軍事報復支持と伝えていますが、私の周囲の人たちはみんなそうなのだろうか？ 企業という環境にいと、みんな自分の身にその日起こったことなどを話しますが、米国は何をすべきかという話にはどうしてもなりません。身近にいるアメリカ人の女性に思い切って聞いてみると、「みんな“numb”（感覚が麻痺している）になっているんだ」との答えでした。大学などにいると、もっと直接的な、生な反応に出会おうのですが、私の周囲では、お互いの無事を喜びあう程度の挨拶で終わってしまいます。国旗を掲げたり、胸にピンで止めたりしているのも、もともとは哀悼の気持ちからだと思っています。もっとも報復爆撃が始まった今となると、どうしてもナシヨナリストイックとしか受け取れませんが。

オープンに話もできず、もやもやとしているところへ、ニューヨークに集まる海外留学生の交流促進を目的とした非営利団体主催の討論会に誘われました。参加者の大部分が、当然ながら留学生で、アメリカ人は少数でしたが、総勢一〇〇人以上が集まり、自分の思ったことを率直に口に出すことができた初めての機会でした。誰もが、軍事に頼らない手段を主張していましたし、また、大手マスメディアの影響、イスラム教の多様性についても話題となりました。しかし、悲しいことに、その翌日に爆撃が始まってしまったのです。

これまでアフガニスタンについて何も知らなかった私は、家族と一緒にまずはアフガニスタン料理を体験してみようと、マンハッタンにあるレストランに行き、そこで、たまたま集まって討論をしていたグループと知り合いにもなりました。アフガニスタン人であるそのレストランの主人の話では、十一日以後、お客の数が激減したけれども、ご主人がテレビのインタビューなどを受けてから、客足も少しずつ戻ってきたとのことでした。帰りはユニオン・スクエアを通り、歩いて帰宅しましたが、おかげで、数日後にワシントン・スクエア・パークで反戦集会が予定されていることを知りました。テレビを観ているだけでは、こういった情報を知ることができません。

反戦集会には四〇〇人弱が集まりました。日系アメリカ人で物理学者のカク・ミチオさん、反戦歌手として知られるパティ・スミスさんなどによる力強い、熱のこもったスピーチ、歌、寸劇などが行なわれました。このような集会についてはほとんど、あるいは全く取材しない大手のマスメディアや、また民主党が政府べつたりで反対勢力となっていないこと、そしてスターウォーズ構想（米本土ミサイル防衛・NMD）などが批判的でした。ただ、今アメリカでこのような集会に集まってくる人た

ちは、よほどの平和主義の信念をもった人だけだろうというのが私の率直な印象です。ニューヨークタイムスも、記事だけ読んでいるとわかりませんが、投書欄を読むと、結構、慎重派の意見が載っています。しかし、最近、「言論の自由は認めるが、大多数が報復爆撃を支持している今、なぜニューヨークタイムスは反対意見 (dissent) を載せるのか」という投書があつて驚きました。

十一日のテロ攻撃の後、炭疽菌が発見されるなど、敵がはつきり見定められず、相手の要求が何なのかわからないという状況の中で、従来の反戦論だけでは、アメリカ人の怒り、ショック、さらにはテロに対処できないというところが難しいところです。

\*

このアメリカに希望を抱いて移住してくる人びとは今でも大勢います。確かにアメリカという国は、努力次第でチャンスを与えてくれるところです。その羨望の的となる国が、同時にこれほどの憎しみの的でもあるとは、本当に理解に苦しみます。

前代未聞のテロ攻撃は、ストレスはあるものの、この世界最強国の、そのまた最大の都市ニューヨークで働いて生活し、都会生活がもたらすさまざまな快適さにどっぷりつかつて暮らしている自分に、改めてその事実を思い起こさせる大事件でした。

この不幸が米国の対外政策が変わるきっかけとなれば、犠牲者もうかばれると思います。そして何よりも、戦争ではない方法で、テロリストを徹底的に裁くように世界が動くことを切に願っています。

(二〇〇一年一月十三日)

※大石さんは、次号にも連載で記事を書いて下されます。反対集会の写真も送って下さいましたが、誌面の関係で次号掲載となりましたことをおわびします。

# チエチエン・アフガン・USA ——テロの真相を考える

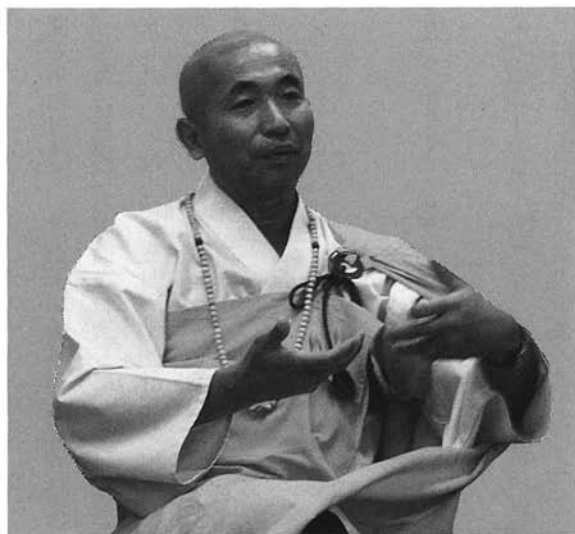
寺沢 潤世

イラク―チエチエン―アフガン……（テロリストの国）と言われる国々を訪ね、その実情を詳細に検証してこられた日本山妙法寺の寺沢上人のお話は、これまで『あごろ』で何度もご紹介してきました。

米国のテロ事件の時、反射的に「寺沢上人の話が聞きたい」と思ったのですが、その上人が、十月初旬、突然帰国。三日の夜、東京・飯田橋で、上人を囲む会が、〈チエチエンニュース編集室〉の主催で開かれました。

国際派活動家として、世界の市民運動家の信望を集めている上人の目に映った、今の世界は――。

湯気のたつお話を、チエチエンニュースのご好意で紹介します。



司会（大富 亮・同ニュース編集室代表） 九一年のチェチェン紛争以来、チェチェン問題に深く心を痛めた寺沢上人は、九五年のモスクワ・グロズヌイ間の平和行進で、またチェチェン入りされました。その後も何度もチェチェンに入り、投獄されたり、生命の危機にも直面されました。それらを通じてチェチェン問題NGO側代表のようなことになりました。そしてつい先日、欧州評議会のチェチェン問題作業部会に参加、活躍されました。今夜は、そのホットニュースをうかがいたいと思います。こんばんは。わざわざお時間をいただきまして、ありがとうございます。いま、大富さんから紹

## 欧州評議会とその関連機構

介がありましたように、今回の欧州評議会（The Council of Europe）のチェチェン問題作業部会に参加したことからご報告申し上げたいと思います。

ロシアがチェチェンに武力侵攻した第一次戦争（一九九四年十二月～九六年八月）から、欧州評議会はチェチェン問題を取り上げています。欧州評議会とは、もともと第二次大戦後のヨーロッパの、民主主義と平和・人権を守る為に設立された組織です。これには二つの組織があります。ひとつは、参加国の政府代表がつくる政府委員会（The Committee of Ministers）。もうひとつは、参加国の国会議員が代表団をつくって参加する議員総会（Parliamentary Assembly）で、この二つの機構に分かれております。また、一国内では解決できない人権問題を解決するための司法機関である欧州人権裁判所（The European Court of Human Rights）が今では兄弟組織となっています。

冷戦終焉直後に、旧社会主義諸国のほとんどがこの欧州評議会のメンバーになっていき、ロシアも

加盟しました。その前後に、第一次チエチエン戦争が始まります。その時すでに深刻な人権侵害が報告されていきましたので、欧州評議会ではロシアを加盟国として認めるかどうか論議があつたわけですが、その当時はロシアを欧州評議会に加盟させることによって、チエチエン紛争での非武装市民への武力行使や非戦闘員に対する武力行使をセーブするのに役立つであろうと欧州評議会では考えて、人権侵害の存在を認めつつも、ロシアを加盟国として承認したわけです。この時、ロシアの人権侵害を声高に訴えておられるセルゲイ・カバロフ下院議員も、「ロシアを欧州評議会に参加させることによる影響力は大きい」と、つまり、ロシアの人権確立に役立つと主張されました。もちろん、カバロフ下院議員は、ロシアのチエチエン武力侵攻と戦争のあり方については手厳しく批判されていますが、

## チエチエン問題を初めて人権問題とした国際機関

国際機関でチエチエンでの人権問題を討議し決議をしたのは、欧州評議会の議員総会が初めてです。そこでは、「チエチエンでのロシアの武力行使は完全な人権侵害である」、そして「不相応な武力が非戦闘員に使われている」と判断しました。そして一応、ロシア連邦の領土不可侵と、「チエチエン問題は内政問題である」というロシアの主張を認めた上で、三つの行動を提起しています。

まず、欧州評議会の政府委員会に、「一定期間にロシアの武力行使による人権侵害が改善されない場合は、欧州評議会からロシアを除名すること」を勧告しました。次に、政府委員会に、「チエチエン紛争という名のロシアの武力行使は完全な人権侵害であるため、欧州人権裁判所に提訴すべき」と勧告しました。そして最後に、議員総会ロシア議員代表団の投票権を剥奪しました。これらは、ロシ

アのチェチェンへの武力行使に対して、明確な批判と具体策を講じたものとしては、今日までに行われた国際機関の決議のなかでは、ずば抜けたものであったと思います。これは二〇〇〇年四月の欧州評議会の議員総会での決議です。

ところが、政府委員会ではこの勧告をすべて無視しました。EU（欧州連合）の対ロシア政策の第一条件は、チェチェン問題ではなかったからです。チェチェン問題でロシアを苦しめるよりも、対話を望んだのです。ロシアに対話をさせるためには、ロシア政府とEUは対決してはいけない、と。

EUはロシアに莫大な経済援助をしていますので、ロシアの民主化、経済改革、政権の安定化が第一条件となっていたのです。その条件下でチェチェンの人権侵害に批判をし、憂慮を表明していくけれども、決して強い姿勢には出ないというのが、政府委員会やEUのコンセンサスであったわけです。

## 国際的なロシア制裁は停滞

チェチェン問題に関しては、EUとロシア連邦の間でさまざまな声明がありました。サミットやG7が行われると、そこでの宣言や共同声明には、経済問題や核、テロ、民主化、言論の自由の問題が出てきて、一番最後に一行か二行ほど、「チェチェン問題は政治解決以外にはあり得ない」「人権侵害を憂慮する」という二つが出てくる。一応、常套句として、言い訳のようにいつてくる。欧州のどこかの政府も、政治的対話と呼びかけはするけれども、第三者として、実際に仲介の場をつくって、チェチェン側とロシア側との政治対話を促進するための手だてには一切手を染めない。また、各国政府は欧州人権裁判所にロシアを訴えることができるにもかかわらず、どの政府もしない。



### 〈年表〉チェチェンの推移とテロリズム

1712年		ピョートル一世の軍隊がカフカスに侵攻、撃退される
1820年代		ダゲスタンとチェチェンの民衆が共同戦線を張り、対ロシア戦争
1834年		イスラム国家「イママット」が建設されたが、59年投降
1917年		ロシア10月革命。反革命軍と戦い、打撃を与える
1920年		カフカス諸民族は今度は共産主義に反対する抵抗を開始
1930年		ソビエト政府に対して、チェチェン人・イングーシ人らが蜂起
1936年		ソビエト政府、チェチェン・イングーシ自治共和国を樹立
1944年		対独協力でチェチェン人が強制移住させられ、半数以上が死亡
1957年		強制移住先からの期間を許され、チェチェン・イングーシ共和国が再建
1990年		民衆集会でチェチェン独立宣言
1994年		ロシア軍、チェチェンに全面侵攻
1995年	4月7日	サマーシキ村でロシア内務省軍が3日間にわたり住民を虐殺
	7月30日	和平合意(独立派武装勢力の武装解除とロシア軍の段階的撤退)
	4月1日	エリツィン大統領、戦闘停止を宣言したが、逆に空爆を大規模化
	6月16日	ロシア大統領選でエリツィン再選。ロシア軍が再び大規模な攻撃
	8月31日	停戦協定成立。独立問題は2001年まで棚上げ
1997年	1月26日	OSCE(欧州安全保障機構)、市民平和基金などを含む各国機関の監視のもと、チェチェン大統領選挙。マスハドフが圧勝
	5月12日	ロシア・チェチェン和平条約調印
1999年	8月17日	ダゲスタン領に、イスラム武装勢力侵入。ロシア、ミサイル攻撃
	9月13日	モスクワでアパート爆破事件。ロシア政府はチェチェンのテロと発表
	9月20日	チェチェンを大規模空襲開始。翌月から地上軍侵攻
	11月8日	マスハドフ大統領がクリントン大統領や国連に調停を依頼
2000年	2月6日	ロシア軍首都グロズヌイを制圧。チェチェン全体が「ロシアの収容所」に
2001年	9月11日	米国のニューヨーク・ワシントン同時多発テロ発生
	9月13日	米国防長官、証拠を示さず、テロの容疑者をオサマ・ビンラディンと断定
	9月20日	ブッシュ米大統領、国際社会に「米国につくか、テロ組織につくか」の選択を迫る。米国、パキスタンへ10億ドルの援助方針を発表
	9月21日	米空母キティホークの出撃に、日本の海上自衛隊の艦艇が護衛
	9月25日	小泉首相、米大統領と会談。テロ報復戦争への「後方支援」を約束
	10月2日	英国・ブレア首相、米国との表明
	10月5日	日本政府「テロ対策特別措置法案」と「自衛隊法改正案」を閣議決定。憲法9条の実質的廃棄につながるとの懸念広がる
	10月6日	米国の後方支援として、航空自衛隊のC130輸送機6機小牧から出発
	10月7日～11日	米国、5日連続、アフガニスタン空爆。NGO事務所で4人即死などの市民の被害に、米国への批判高まる

(編集部作成 参考:『チェチェン 知らざる戦争』市民平和基金 編集・発行 2000年)

このような状況のなかで唯一行われたことは、欧州評議会議員総会が、ロシア議員代表団の投票権を剥奪したことです。これに対してロシア代表団は徹底的に抵抗し、欧州評議会議員総会への出席を拒否しましたので、ロシアが出席をしないまま、二回ほど議員総会が開催されました。これに対して、議員総会も、「自己満足的な批判はしたけれども批判だけであって、現地のチェチェン問題を解決するための議員総会としての手段がなくなった」、という反省が起きたわけです。そういうなかで、ロシア側と欧州評議会議員総会との間でのさまざまな折衝が、この一年の間続きました。

こうした状況のもとで、ロシアが議員総会の忠告と圧力を受け入れていったひとつに、プーチン大統領がチェチェンの人権を回復させるために「大統領人権特別顧問」を設置したことがあります。その事務所をチェチェンに設立して、チェチェンの一般市民への人権の侵害、例えば、勝手にロシアの兵士がチェチェンの一般市民を殺戮したとか、あるいは強制的に収容所に連行されていって、そのまま殺されたとか、虐待を受けた、あるいは、ロシアの兵隊がチェチェンの民家に押し入って強盗をしたというようなことのひとつひとつを、チェチェンの市民が訴えることができるようになったのです。その訴えが真実かどうかをチェックし、その上でそれを軍法裁判所や民事裁判所にかけられるようになりました。しかし、実態は、それとは大きくかけ離れたものでした。

## チェチェン難民の新たな運動の流れ

その後、新しい動きとして、チェチェン民間人たちが、早期政治的解決を訴え、二〇〇一年九月十五日、イングーシュ共和国の首都、ナザランで、チェチェン国民会議を開くことになりました。とこ

ろが、ロシア側が強権を発動して、開催前日に、チエチエン側の代表を一網打尽に連行したのです。そして一〇〇名近く入っていた代表者ひとりひとりの人狩りが始まった。主催者の代表だったチエチエンの若手実業家、サランバクマイコフ氏—私の四、五年前からの友人なのですが、彼も連行されて暴行を受けました。

その後、彼が釈放されてから、集まった者だけで——といっても四、五名ですが、野外で会議を開いたのです。そしてチエチエン大統領、プーチン大統領、国際社会、欧州評議会へのアピールを採決して、それぞれに提出したのです。

私はその文書を読みましたが、なかなかすばらしいことが書いてありました。

もうひとつ計画されていたのが、南コーカサス地域の隣国・グルジア共和国の首都トビリシでの会議です。グルジアでも多くのチエチエン難民が発生している。かなりのチエチエン野戦司令官が、コーカサスの山を越えて、グルジア側の難民に混じって入ってきている。そこでトビリシで、九月十日から十三日まで、チエチエン海外移住者共同体代表者会議を開こうという話になりました。グルジアに住むチエチエン難民をはじめ、ロシア、トルコ、ヨルダン、ヨーロッパ、アメリカなどの海外移住者共同体の代表者を全部集める。さらに、チエチエンにいる難民たちの代表者たちも呼んで、チエチエン海外移住者共同体および難民の国際会議を開催する。そこでも和平解決に向けたチエチエンの統一的な姿勢を示す。そういう試みがあったわけです。

私はその推進委員会のひとりとして、参加するつもりで行ったんです。そこでどういう決議をするかをチエチエンの代表者や委員会の人たちと話し合って、まとめて決議案をつくったのです。

## 難民国際会議を流したアメリカの大テロ

ところがグルジア政府の圧力がかった。ちょうどその時に、ニューヨークとワシントンの大テロが発生しました。ロシアはグルジアに対して「あなた方はチエチエンのテロリストをかくまっている国である」「グルジアにもロシアは入り込むぞ」と恫喝した。ニューヨークのテロによって、世界中がテロ撲滅のためにとカーツとなっている流れにありますから、ブーチン大統領もそれに乗じて「チエチエンはイスラム教テロリストだ」ということで徹底的に叩く姿勢を示しました。グルジアにも恫喝する。そんななかで、結局この国際会議もお流れになりました。

こうして、ナザランのチエチエン国民会議はつぶされ、また、トビリシのチエチエン難民国際会議も流れてしまいましたので、ストラスブルグの欧州評議会のもとで初めて行われようとするロシアとチエチエンとの対話で、チエチエン側がどんな建設的な対話のための材料を提供できるかという、材料はないわけです。そこでまたチエチエン人が個人プレーをはじめたら、それこそチエチエンは完全に孤立してしまう。それだけは絶対に避けたい。では、どうするか。

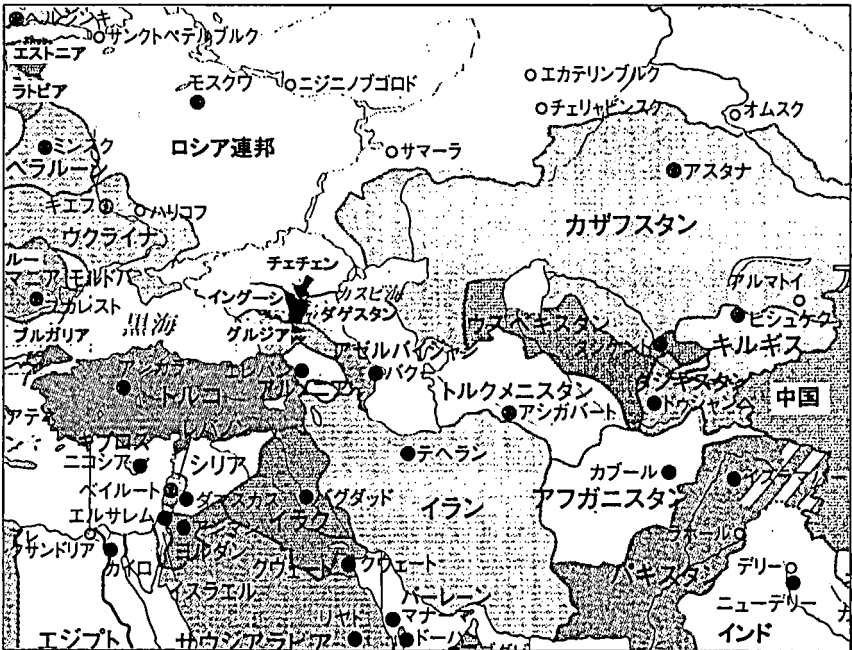
## 平和行進を始めようとした難民も一網打尽に

そこで、難民国際会議のための決議案をもとにして、トビリシに来ていたチエチエン難民と平和行進の計画を練りました。しかし、グロズヌイからモスクワへと歩いて、モスクワからストラスブルグ

の欧州評議会に訴えることを計画したこの行進も、やはり出発前に一網打尽に取り押さえられました。断食中のキャンプも全部がなぎ倒された。報道陣も、すべて捕まった。難民たちが最後の希望を託したこの平和行進も、強制的な力の行使によって挫折したのです。

そういう状況の下で、代表団もみんなグルジアのトビリシに集まってきていた。私たちがチエチエン問題作業部会に出てくるということで、みんな相談に来ていた。救国国民委員会も来ていた。国際難民委員会も来ていた。そういうことで、チエチエンの主だったNGOがみんなトビリシに来てくださった。

そこで、本当は国際会議の名のもとで決議がしたかったのですが、それはできない。そのため、結果的には流れてしまったけれども、一応、新しく始動し始め



たチエチエンの一般市民、市民社会の運動を統一的な立場でまとめて、その決議を共同声明の平和提案として、みんなで採決しました。

私はそれを持って欧州評議会に行くという役を仰せつかった。それで欧州評議会のチエチエン問題作業部会に向かったのです。

四〇以上のチエチエンNGOの声明の内容は、次のとおりです。

## 【チエチエンNGOのアピール】

チエチエン民族存亡の危機の今、

一、チエチエン民族は絶対恒久平和を希求することを内外に宣言し、

一、武力紛争による民族滅亡の悲劇を即座に止めることが、国際社会、ロシア連邦、チエチエン民族の緊急共同の責務であることを確認し、

一、平和回復の基本原則として

武力テロ手段によつては問題は解決できないことを認め、非暴力手段による政治的解決を決意し、

●ロシア軍の軍事行動は、どのような名目であれ、事実はチエチエン人の国際法に保障された基本的人権をすべて蹂躪したものであることを指摘し、

●即座にチエチエン人の基本的人権の回復を保障することを求め、

一、双方が、不毛の相互非難と不信の悪循環を乗りこえ、和平和解、平和共生の道をさぐることを呼びかけ、このためには、

●過去の過ちを認め（ロシア帝国時代、赤軍テロ、スターリンの強制移住から、ポスト・ソ連の二

度の武力紛争がチエチエン民族にもたらした悲惨な過去を正當に認めた上で、

新生ロシア連邦は過去のロシア帝国、ソ連邦と決別した新しい国家理念を誠実に希求し、少数民族、植民地政策による被植民地民族の権利回復を保障し、

国際社会は、国連事務総長の諮問委員会を設置し、ロシア・チエチエンの和解と共生の政治プロセスを助け、

一、正常化への共同プログラムについて、国際社会、ロシア連邦、チエチエン代表が協議を開始し、

●武装解除、ロシア軍撤退、治安維持、臨時行政の確立、

●難民の帰還と生活基盤の再建、

●紛争後の社会インフラの再建、

元兵士の社会復帰、青少年の精神的リハビリテーションなど、暫定的な移行期間中、国際機関が、ロシア連邦とチエチエン代表側の参加の上で施行する。

以上の期間においてチエチエン住民の住民投票で会議、チエチエンのあり方を決定する。

●チエチエン永久平和非武装地帯設立と、ロシア連邦、全コーカサス地域の安全保障システムを関係地域諸国と共に設置する。

## 期待をこめて欧州評議会に集まる

久しぶりのストラスブルグには、日本に迎えた母親協会のマディナ・マゴマドフさんや、今回の平和行進を主催した婦人、ザイナツプ・ガシャエワさん、チエチエン救国国民委員会の委員長、スルラ

ン・バダロフ氏、北コーカサス婦人連盟の指導者、リブカン・バサエワさんもいました。またチエチエン・マスハドフ政権の代表として、チエチエン各界代表二〇名のうち五名も参加しましたが、チエチエン議会副議長（事務所はボーランドのワルシャワに置いています）が、行方不明になっていて、実は逮捕され、暗殺されていると言われている）や、外交委員長のアヒアド・イディコフ氏、人権委員代表のバガブ・トタコフ氏、そしてチエチエンのデンマーク大使、オスマン・フェルザウリ氏が、正式なマスハドフ側のオフィシャルなメンバーとして出席することになっていました。

## 欧州評議会と関係を絶つと表明したマスハドフ大統領

そこで、初めて政府側の代表とNGO側が一緒になって、どう全体でやっていくかと、前夜に作戦会議になった。そこへチエチエンのマスハドフ大統領から指令が出ました。「もはや欧州評議会には見切りをつけた。欧州評議会はロシアの言うままに乗せられてしまっている。ロシアの作戦——ロシアの戦争犯罪を隠蔽する工作に完全に乗ってしまった。われわれは欧州評議会とは縁を切る」と。それで、NGO代表も参加を見合わせるよう要請されました。

マスハドフ側の欧州評議会への憤りは明確です。「結局、今日までなにひとつ解決されていない。あなた方は、チエチエン問題を本当に解決する意欲はない。われわれはあなた方のことを信用しない。出ても無駄だ。われわれが出れば、ロシア側に利用されるだけのことでしかない」と、作業部会への参加を拒否したのです。私はその時、これは賢明な作戦かな、と一抹の疑問をもったのです。世界は今、チエチエン問題よりも、テロ騒動で世界戦争が始まるという前夜です。ロシアはチエチエンをイ



スラム過激派と称して侵攻したのですから、「彼らはテロリストだ。チエチエンはロシアの一部分で、戦争はもう終わったのだ」と言い続けている。そのプロバガンダが八〇%功を奏している。そんななかで、チエチエンはますます孤立化する道をみずから選ぶことによって、国際社会にアピールする場所さえ失うのではないか、不利な立場を選んだのではないかと、私はその時は思いました。

このような経過があつて、チエチエン問題共同作業部会は始まりました。

## チエチエン共同作業部会にはNGOだけが出席

NGOは、「私たちはオフィシャルではないから出ます。自分自身の主張をすればいい」、と言つて出席しました。民衆、難民の声を、一日も早く戦争を止めてという声を、ここで主張しなくては、来た甲斐がないじゃないか、というのがNGO側の思いでした。政府代表には、出席するなという命令が出た。しかし大統領はわれわれがどう思うかを決める立場にはない。私たちは私たちで、この戦争を止めさせる市民社会の声を訴えなければいけないが、政府代表が出席すれば、マスハドフ側が出たということ、ロシア側のプロバガンダが流されて、結局不利になる。「ロシアと欧州評議会はグルなんだから、出れば利用されるだけなんだ」という戦略的なあり方をとつても仕方がない。しかし、市民の声を伝えなければ、その機会さえ失われる。自分で放棄すれば、ようやく初めて得たその場さえ、失うことになる。せっかく持ってきた難民たちの声を届けなければ裏切ったことになる。自分たちは、わずかであつても主張だけはしようと。そういうことで、私たちNGO代表は出席し、政府代

表は出ないことになり、その理由を声明として、欧州評議会の委員長にも理事長にも提出しました。

## ロシア側の戦略を見ぬいての欠席

作業部会は土曜のお昼から始まったのですが、開催直前までマスハドフ側も出席するということがたつたので、欧州評議会のほうは、「初めてチエチエン側の主張を認めて、正規の場所で公式に発言させることができた」と、自信満々でした。それだけに、「政府代表は出ない」という声明を見せつけられて、がっかりしました。「何のためにここまで準備したんだ」と。「あなた方が来るということで準備をしたんだ。ここであなた方が主張しなければ、すべてがご破算になる」と。

それに対しチエチエン側は、「あなた方は、結局ロシアとグルなんだ。その工作のもとで出席するのは、結局、マスハドフ大統領が暫定政権を認めることになる。新しい憲法、ロシア連邦内部における暫定的な政権づくりのための下準備なんだ。これは一九九六年の選挙で正規に選ばれたマスハドフ大統領政府を転覆させる陰謀なんだ。したがってわれわれは出ない」と。

会議は実際そういう方向に流れていきました。そこでNGO側は作業部会の中で、「マスハドフ大統領は国際監視のもとで正式に認められた政府であり、議会だ」と言い続けたのです。そして、「その正当な政府を勝手に転覆する目論見に私たちは参加できない」とNGOは声明を出したのです。

そこで作業部会議長のジャド卿は開始を延期して、外に出てきました。そして私に「是非マスハドフ側が出席するよう、説得してくれ」と頼みました。「ここまでやって来て、なぜいま出ないのか」「あなた方はあなた方の主張をすればいい」と。「ここは対話の場であって、政治交渉の場ではない。コ

ンサルテーションであつて、どのような意見もすべて主張できる。ここでは何も決定しない、これはただの話し合いの場であると保障する」と言われたのですが、マスハドフ側が参加しなかったのは、ある意味では結果的にはよかつたと思います。もしも参加していたら、この作業部会は、マスハドフ政権にとって代わる新たな暫定的な政権を樹立するために、チエチエンの人たちがいろいろな対応をしたんだってという話になったと思います。

## ロシアの策略の中でのNGOの苦心

欧州評議会は、チエチエン人が自己主張する場を正式に初めて設けたんです。ロシア側がこれまで拒否してきたのに、ロシア側もチエチエン人側を受け入れるようになって、初めてそういう場ができた。けれども、この作業部会の本当の意図は、チエチエン人の中だけでコンサルティティヴ・フォーラムをこの作業部会の話し合いの中からつくっていくことでした。あらゆるチエチエンの分野の人びとを集めて、話し合いをさせて、そこから新しいチエチエン統治の機構づくりの母体にしうとしていた。ところがマスハドフ大統領にしてみれば、新たな機構づくりとは何ごとだという。自分たちがそ正式な政権だと。そして停戦はわれわれマスハドフ政権との話し合い以外にはないのだと主張したい。ロシア側は、「彼らはテロリストだ。彼らとは対話はしない。もう、チエチエンの軍事行動は解決したのだ」と主張して、チエチエンの内部の話し合いさえまとまれば、新たな統治機構ができるということになりました。両者の間には根本的な認識の違いがある。この違いをどう埋めていくか。実

際は政治交渉なのです。

## プーチンVSマスハドフ、丁々発止の駆け引き

その間にも、大変なことがあったのです。マスハドフ大統領が、突然の声明を出した。「これからロシア国内の軍事拠点の総攻撃を始める」と。ロシア側にすりよった者を暗殺するという声明も出そうとした。ニューヨークのテロで大騒ぎの最中にそんなことを言ったのです。それは何に対する反応かというと、プーチン大統領が「七十二時間以内に武装解除に応ぜよ。全面降伏すれば考え直す」という最後通告をマスハドフ大統領に突きつけた。それに対する反応です。しかし、こんな反応をすれば、プーチン大統領は、すかさずチェチェン全面攻撃作戦を始める。アメリカのアフガニスタン攻撃の陰に隠れて徹底的に攻撃する口実をつくってしまいますから、「そうでない方向に変えて下さい」と、マスハドフ大統領にすぐに緊急電話連絡をしてもらいました。

半日ほどして、プーチン大統領が演説しました。「アメリカのテロ撲滅戦争にロシアは協力します」と。同時にテエチエン紛争には過去の歴史的ルーツがある」と言った。マスハドフ大統領は、そのひと言をすかさず利用して、「プーチン大統領が過去の歴史を認めたから、話し合いに応じる」と、方向転換の声明を出したのです。パツと路線を変えて、交渉相手にはザガエフ副首相を指名しました。

マスハドフ大統領は一度、グルジアのシュワルナゼ大統領に仲介役を依頼し、シュワルナゼ大統領もそれをOKしたのですが、ロシア側は拒否しました。私のかねての意見ですが、二者だけで話し合っても無駄です。誰を仲介にして、どこで話し合うかが大事なのです。一日（二〇月一日）までは

シユワルナゼ大統領は「仲介役をしてもいい」と言っていたのですが、今日の新聞を見ると、「ゲルジア国内にいるチエチエン人はみんな国外に出てくれ」とシユワルナゼ大統領が言った、と書いてある。一日の間に、こうも変わるのですね。

そういういろいろないきさつはありましたが、今回のストラスブルグの活動は、それなりの意味はあったと思います。

最も大きな意義は、欧州評議会という国際機関において初めてチエチエン紛争の政治解決に向けてロシア・チエチエン間の対話が準備されたこと。そこでチエチエン市民社会の活動が初めて認知されたこと。欧州評議会の議員総会議長、人権問題事務官、チエチエン問題共同作業部会議長などとNGO代表が、数時間にわたる懇談を持てたことです。これからの政治的解決の道程において、市民社会の参加なくして本当の解決はあり得ないことを、国際機関が認めたことの意味は大変大きいと思います。

## 豚のように惨殺され、内臓まで売られるチエチエン人たち

しかし、チエチエンの現状は、毎日毎日さらに悪くなっています。ロシア兵が駐留している今は、チエチエン全部が収容所の中に入ったのと同じような状態になってしまいました。ロシア兵が、突然民家に押しかけて男女を連行する。信じられないことですが、そうして手を切ったり、足を切ったりする。それを取り戻そうとすると、数千ドル、日本のお金の感覚で言えば、数千万円にも相当するような代金を要求するのです。手を切られ、足を切られ、不自由な体になっても取り戻そうと、家族は必死で大金をつくる。その結果、身障の家族をかかえてますます窮迫のどん底に陥る。

これは、まだいいほうです。殺して内臓を売るロシア兵もいるのですよ。しかもその死体売りつける。日本人同様、チエチエンの人は、死体でも大切にしますから、そのために何百ドル払つてもと、お金をつくるのです。

そんなチエチエンで、チエチエンの人びとは、つい何年か前のチエチエン人とは、全く別人のような表情になりました。若者も働き口がない。惨劇に魂が深く傷つき、それを忘れるために麻薬を吸い、毎日ただボーッとしている。生きているのでも死んだのでもない。全くうつろになった人びともたくさんいます。これまでどんな時にも、あんなに輝いて、大国ロシアと戦い続けてきた、あの、やさしい、すばらしいチエチエン人は、どこに行つたのだろう。私の胸はつぶれそうです。

## 世界のどの国の人よりも、米国の「報復」を恐れ悲しむチエチエン人

そういう痛ましい経過があるだけに、チエチエンの人たちは、アフガニスタンの人たちに、心から同情しています。

チエチエン侵攻の始まりは、モスクワのアパートの爆破事件でした。真相は不明なのに、「テロリストの仕業だ」「そのテロリストはチエチエン人だ」という話になり、チエチエン侵攻がドツと始まった。そしてその戦争を、ほとんどのロシア人が熱狂的に支持したのです。あのすさまじいチエチエン戦争と同じことがアフガニスタンでまた起こる、とチエチエンの人たちは、それはそれは心配しています。

イスラームの教えは、サラーム（平和）が基本です。コーカサスの昔から、チエチエンの人びとは、純粹で勇猛ではありましたが、自ら戦争を仕掛けたことは一度もありません。この上なく平和で穏か

な人びとです。しかし、彼らをいじめつけた帝政ロシア以来の記憶を持つ人びとにとっては怖い。チエチエン人のテロがアパートを爆破した」という流説をつくりたかった構造があったと、チエチエン人は感じています。とくに第二次チエチエン戦争（一九九九年九月）の前に頻発した爆破テロは、「チエチエン人によるテロ」を意図的につくり上げ、ブーチンの大統領選挙勝利への道具にしたのだと、チエチエンの人びとは、みんな信じています。ですからそれと同じことが、今ではアフガニスタンで始まると、みんな反射的に心配しているのです。

## マスメディアの報道に惑わされないでほしい

モスクワのアパート爆破から始まったチエチエン侵攻戦争の構図が、今回はニューヨーク・ワシントンのテロを、「イスラム・テロリスト」によるものとして、世界戦争につなげるのではないかと、一番敏感に受け止めているのは、チエチエンの人びとです。その裏に、国際犯罪組織化した元KGBのつながりを否定できないからです。

アフガン戦争で、アフガン側の強い抵抗に手を焼いたソ連が、親を失った難民の子どもたちをKGBの下で徹底的にテロ教育をした事実、冷戦の間に、アメリカ内部からのテロ攻撃によるシミュレーションを、ソ連側が入念に準備してきたこと、そしてソ連の崩壊後、KGBくずれが、マフィアや国際犯罪地下組織に流れたこと、チエチエン戦争の中で、ロシア国内に、法の統制を完全に外れた権力が誕生し、それが国際的な陰謀や犯罪に関わっていること、その権力は、第二次チエチエン戦争では、イスラム急進派と言われるテロ組織ともつながったことは、これらの地域に精通している人は知って

いることです。

世界的には戦争を待っている国も企業も個人もあります。その根底には二一世紀の生き残りをかけた地球資源、エネルギー資源獲得競争があります。

湾岸戦争で、アメリカは、サウジというイスラムの聖地に軍事拠点を置くことに成功、中東の石油支配を確実にしました。今回のニューヨーク・ワシントンテロを、「イスラムのテロ」に仕立てることによって、アメリカもイギリスも、この一世紀の間、入りたくても入れなかった旧ソ連領の中央アジアに軍隊を入れることに成功しました。それにより、カスピ海・中央アジアの石油・天然ガス資源が西側列強に支配されることになり、過去二世紀のロシアの支配は一挙に崩れました。

次に、ここでタリバーン政権を潰滅させ、西側寄りの新政権を樹立、人民も西側寄りにすることによって、二一世紀のエネルギー資源は、アメリカの一極支配が確立します。

大国の侵略が始まって、アフガニスタンの人びとは二〇年間、チェチェンの人は七年間、苦しみ続けています。「世界でテロの被害にあつた人びとの苦しみが、そしてアフガニスタンの人びとの苦しみが一番よくわかるのは、そして誰よりも心をいためているのは、チェチェン人だ」。チェチェンの人びとは、そう言つて心の底から悲しみ、心配しています。「このままではアフガニスタンが、第二のチェチェンになる」と。

二〇年間、戦争で苦しんできたアフガニスタンの人びとに、世界のどの国も冷酷でした。そのアフガニスタンが、さらに大きな戦争の口実に使われようとしています。

心配なことに、米国中心の軍事侵攻は、世界中のムスリムの反発に火を注ぎ、中央アジア、南インドを、收拾のつかない宗教戦争に巻き込むことになりかねません。そうなると、武力による制圧は不



可能です。それこそ、キリスト教対イスラム教の第三次世界大戦につながりかねません。もしも人類が、第三次世界大戦突入という危機を回避できるとするならば、国際社会が、今の今まで無視してきた本場の暴力、国家による暴力の犠牲者たちの声を、真摯に受けとめること以外、ないと思います。

それなのに日本の首相は、その悲しみとまるで無縁です。『朝日』や『赤旗』も、最近になつてやつとアフガニスタンの子どもたちの窮状を書き始めました。それを見て、私は腹が立ちました。二〇年間、一行も書かなかつたではないか」と。

小泉ブームをつくりあげたのも、日本のマスメディアです。海外から見ていると、「民主主義の仮面をかぶったファシストを、日本のマスメディアがこぞって首相に仕立てた」ように見えました。

日本のメディアが墜落しきっている今、頼りになるのは不戦の志を失わない市民だけです。第三次大戦は、思いがけない早さで訪れる可能性があります。今はぎりぎりの危険な淵に立っていることを、くれぐれも忘れないで下さい。

\*

国際的な平和運動家として、生命の危険にさらされながら、あらゆる情報を集めてきた上人の証言に、残念ながら日本のマスメディアは耳を貸そうとしませんでした。

戦争の恐ろしさ、いやらしさを、心底、憎む上人は、ぎりぎりの危機感に立つて、故郷の母上を訪ねる暇もなく、ニューヨークの世界宗教人会議に旅立たれました。その夜半、アフガニスタンへの空爆が始まったのです。思えば、この報告をなさった寺沢上人は、いつになくピリピリしておられました。第三次大戦を、そして大国と超大国の野望を止め得るものがあるとすれば世界の市民。その先頭に立つ上人の決死の覚悟を感じました。

## 読者の声

アメリカの「テロ報復戦争」と日本の自衛隊派兵に反対する！

●誰だつてテロなんかやりたくないでしょうが、何事にもそれが起る原因があります。考えてみると、どこの国よりも、アメリカこそが巨大なテロ国家であり、意見の異なる弱小国家を痛めつけてきたのではないのでしょうか。戦争中の日本への二発の原爆投下、戦後の朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、ユーゴ空爆、そしてイスラエルに加担してのパレスチナ攻撃。そしてまたも、テロの“容疑者”がいるらしいと想定しての「報復」の名の大虐殺がはじまりました。しかも、いかにも人道的立場に立っているかのように見せかけて、ミサイルと爆弾の雨のなかに、チョッピリの食糧投下。いつもの“アメとムチ”での他国侵略です。それに対し、自衛隊などを派遣して、ブッシュに尻尾をふって忠義づらする小泉政権は、のちの世の笑ひ者になるでしょう。

それにつけてもマスコミの責任が、強く問われます。小

泉人氣をあおり、アメリカ側の報道に偏っている限り、真実の姿は見えません。出版の片隅にいる人間としての責任を痛感します。

たった一人でも戦争に反対したアメリカ女性議員のように、勇氣をもつて発言する時だと思います。

(埼玉県狭山市 松本昌次)

●「これはテロではない、戦争だ！」というブッシュの言葉でアフガンの戦闘は始まった。ニューヨークでは(亡くなった人には申し訳ないが)ビルが四、五棟倒壊、六〇〇〇人の死者。東京大空襲ではわずか数時間で十万人、広島・長崎ではあつという間に何十万人の人が死んでいった。焼夷弾の降りしきる中、逃げまどつたことのある人間にとつて、少し離れりや安全というあんなもの、戦争なんかじやないとはつきり言える。

それなのにビンラディンの犯行を証明しないままに突入した空爆は、多くの無辜の民を殺傷している。湾岸戦争の時、アメリカはピンポイント攻撃（軍事施設だけを攻撃する）ということを強調してマスメディアに訴えた。しかし湾岸戦後、斎藤千代さんがルボされたものを読むと、ピンポイントどころか、非軍事施設が大量に破壊され、そのため一般市民が大量に殺傷されたという事実が明らかにされている。今回もタリバーンではない多くの民衆、特に女性、子ども、老人等の死傷者も多く出ているが、「人権は国権より上位の価値」という認識が世界化し始めている現代、アメリカはこの問題にどのような責任をとるのだろうか。

巷にあふれるヒソヒソ話。「冷戦後、新しい武器を作っても、テストするチャンスも、売るチャンスも、売り歩く先も少なくなったアメリカの武器の大量消費こそ、人を人として見ないテロと同じ」。これが真実なら悲しいことだ。

あの弾丸の下で子どもを連れて逃げまどう何の罪もないアフガンの女性たちに手をさしのべたいと思っている女性たちが私の周りにたくさんいる。けれども、パートに出てネジを巻き、小さな部品をつくってお金を稼ぐことが、実は何かの兵器の部品をつくることになっていないかどうかは、保証の限りではない。そういう意味では私たちもアフ

ガンの生き血をすすって生きているのかもしれないと思うとやりきれない。二一世紀は「命」の世紀だと言った人がいた。他人の座敷にしよつちゅう土足で飛び上がって、そこらじゅうをグチャグチャにし、小ぎれいな自分のお家で民主主義とかを唱えている人たちには、永遠に戦争の悲惨さなんかはわからないだろう。

タリバーンを再生産しない方法は、今アフガンの母親の胸に抱かれている子どもたちが、おなかいっぱい食べ、安心して眠ることのできる生活を取り戻すこと……。

調査によると男性より女性の方がはるかに平和志向であるとのこと。なぜなのか？

小泉首相は、国会答弁でその理由を答えることができなかった。女はずっと弱者として社会に存在し続けてきた。だからアフガンの女に我が身を重ねて「戦争反対！」と叫んでいるのです。反戦を訴える国会の女性議員が「平和ボケ」なら、金と権力に走り、戦争という国家的テロを敢行する人たちは「蛙を見せろー」(Show the frog! — 小泉首相の国会答弁)と喚く「人喰い人種」です。

怒りにまかせて争うのではなく、この美しい水の惑星に共に生きる英知こそが今必要とされているのではないのでしょうか。

●今回の自爆テロは、あくまでも犯罪であって、戦争ではない。国際犯罪を裁くルールで裁かれるものでなければならぬ。戦争と決めつけたのは米国であり、日本は国際犯罪を裁くルールから踏み出してはならない。なしくずしに憲法九条が拡大解釈されていくことは、もう我慢できない。派遣される自衛隊員には拒否する自由はないに等しいのでしょうか。「そんなつもりで自衛隊に入ったんじゃない隊員」は、どう感じているのでしょうか。若者を戦場に出したがつている老人たち、中年たちこそ、先頭に立つて行くべきです。

(新潟県小出町 櫻井勝恵)

●テロは決して許されることではありませんが、一体何故、こういうback groundがあつて、このようなテロ行為が強行されたのか、もうひとつ、よくわかりません。

報復ということですが、まず、中東諸国との関係、パレスチナ問題、そして何より二〇年以上も戦争にあぐら、恐怖と生き、食糧がないつらさに、生きる希望を失っている何十万、何百万人もアフガンの人たちを、これまで見殺しにしていた先進国の対応の非人間的なあり様を、もう一度問い直し反省して、アフガンの罪なき人びとの救済もきちんとした上で、テロを行なった人びとと対峙して、思

想はともかく行為は許されることではないと、世界中の人びとが再度認識することが必要だと思います。

自衛隊派遣は、非武装の医師、薬剤師、看護の人たち、ボランティアの人たちなどが赴くこととし、自衛隊以外には武器を使わない自衛隊員が、アフガンの人びとの保護を目的として、平和部隊として随行して行くのが良いと思います。

(兵庫県三田市 西田冬至子)

●とうとうアメリカは報復攻撃を開始した。テロ事件発生後マスコミから流される報道に驚き、おののき、「平和のため何ができるか」それぞれが考え、メールでもいろいろな情報が流れてきた。

「日本は国際的なピエロである」との友人の言葉に、なるほどとうなずいた。デモ、署名、集会……。「私に何ができるか？」と考える。斉藤千代さんが湾岸戦争直後のイラクに入られ、その報告会を開催したことを今思い出し、アフガニスタンの女性や子どもたちへの援助しかないのかなと思う。

(大阪府 澤田和子)

●「戦争は許されない」「今こそ自由と民主主義を考えよう」。特集号名について思いめぐらしながら、平和ボケの

日本で流されていることに気づかずに生きてきた年月を反省し、悲しくなりました。米国の報復戦争を支援するのはなく、今、何をなすべきか、世界がともに考えよう。

「まずアフガンを知ることから」と、リーダーシップをとることが日本の使命ではないでしょうか。私にとつて平和を願う原点は、四歳での敗戦と父の死。もう一度、しっかりと自分を見つめて、本当の気持ちを実行に移したいと思います。そんな意味で『あこら』との出会いは感謝です。

(神奈川県藤沢市 大浅田敦子)

●九月一日以来、毎日毎日CNNや21チャンネルで刻々と変わる世界の情勢を追っています。日本に関して言えば、「憲法九条があつて良かった」の一言です。さすがの小泉首相も「憲法の内において武力行使を伴わずに後方支援する」と発言。具体的に現実にはどうなるのか、あいまのままだが。

共産・社民ががんばってくれていますが、一方、国際情勢の中、何も行動せずに済むはずがないこともわかります。アフガンの人びとの国情や考え方についても、今まであまりに無知でした。私は「戦争」ではなく、国際法廷で裁判すべきと考えます。

(横浜市 衛藤栄津子)

●テレビのニュースを見た時、あの恐ろしい行為を「人間」ができるのか(多くの乗客がいる旅客機をテロの手段に用いること)と思いました。

けれどもアメリカに代表される「何か」に憎しみをいだく人が多くいるかもしれないことに、まず向き合わないといけないと思います。

自分の息子が徴兵されなくても限らないという不安も感じました。復讐は憎しみを増すだけです。ダグラス・スミス著『経済成長がなければ私たちは豊かにならないのだから』の中で、「二〇世紀の戦争は国民を守ってはこなかった。死傷者を増やし続けただけだ」とあるのが、強く心に残りました。

報復戦争も、自衛隊派遣も同じ過ち。二一世紀は関係国の国民の死傷者を増やさない地道な平和的努力の世紀にしたいと思います。

(名古屋市長 森崎典子)

●テロに対して報復という行為が承認されるのでしょうか。テレビなどでアフガニスタンの難民の人たちの様子を見るにつけ、丸腰のこのような人たちに、報復とか戦争と称して銃口を向けるアメリカや、それに追従する日本政府の気持ちにえたいの知れない恐しさを感じます。テロには断固

反対ですが……。でも、いつも他国の地で一般人に無差別に銃口を向けるアメリカ人。私たちの国土で、このような報復という名の大量殺りくがなされたら、一般の私たちが標的になったら……。日本政府は、やっと気づくのでしょうか。

(愛媛県北条市 ネーサン)

●狂気に走る人間の「正義」は恐しい。犠牲になった多くの人たちに哀悼しています。

人類史上初めての自爆大量殺人の報道に接した時、アメリカが真に偉大な国家であろうとするならば、真に人類の指導者の道をゆくなら、「話し合いのテーブルを用意することだ」と思いました。そして報復戦争に要する巨大な経費は、犠牲になった人たちに捧げるべきだと。

報復戦争のために日本の自衛隊を「後方支援」のために派遣することなど、考えてはなりません。現実離れた思いかもしれませんが、人類は成長のための選択を迫られているのです。

立場の異なる人間を力で支配しようとしてきた人類の歴史を変えなさいと、神は悲しい覚悟をしたのだと思います。人類の叡智は、この戦争を回避できると、わたしは最後の最後まで信じます。

希望のリンゴの木を植えつづけます。合掌

(長野県上伊那郡長谷村 指田志恵子)

●世界は父ブッシュの湾岸戦争から何の教訓も得なかったのか。ブッシュの好戦癖にまたしてもまきこまれようとしています。「テロも戦争もNO」の声をこそ「同時多発」しなければならぬ(今)です。

「寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか」という渡辺一夫氏のエッセー(一九五一年)があります。話はキリスト教と古代ローマ社会の戦なのですが、不寛容Ⅱテロ一派という図式で読むと不思議なほど通じます。

「既成秩序の維持に当る人々は……：自らが恩恵を受けている秩序が果して永劫に正しいものか。動脈硬化に陥ることとはないものかどうかということを深く考え、秩序を棄す人々のなかには、既成秩序の欠陥を人一倍深く感じたり、その欠陥の犠牲になって苦しんでいる人々がいることを十分に弁える義務を持つべきだろう」

「寛容の武器としては、ただ説得と自己反省しかないのである」

「相手に自ら殉教者と名乗る口実を与えることは、極めて

危険な、そして強力な武器を与える結果になるものである」

こういう相対的な視座を持ち得ない「国」「人びと」は、二一世紀にはどういふ運命になるのか。テロ一派のあの周到な計画、読みはそこを見すえているように思います。

事の本質、彼らの提起をどう受け止めるかに「未来」がかかっています。

(京都市 服部素)

### ●「異なる旗の下に」

四二億の地球の歴史に人類が登場するのは、わずか数百年前のことである。「文明の歴史」は同時に絶え間ざる「戦争の歴史」でもあった。同種同士がいがみ合い、殺し合い、共存すべきこの小さな星すらも危機に陥れている。何故闘いが続くのか？

バベルの塔に象徴される人間の傲慢がお互いの理解を損ねているとも言えよう。もうひとつの要因は、お互いをわけ隔てている「我欲」にあるのではないか。「富める者」と「貧しき者」の「南北格差」は、ますます深刻化している。「飽食の時代」を謳歌しているかたわらで、長年の内戦や旱魃によって飢えに苦しみ生命の危機にさらされる絶対多数の人びとが存在する。

幾多の悲惨な戦争を経験した我々の「ホモ・サピエンス」(知恵ある人)たる知恵が問われる新たな世紀に、「新たな戦争」が始まろうとしている。

人類は、何処に向かっているのか？そして世界はどうなるのか？それは残念ながら誰にも予測がつかない。

米国のブッシュ政権は、テロを「自由と民主主義」「国際平和」への挑戦と受け止め、この国家的危機を乗り切るための「新たな愛国心」の高揚を訴える。テロに屈しない「偉大なるアメリカ」の威信にかけて「正義の戦争」へのアライアンス(同盟)を呼びかけた。

「敵か味方か？」

「Show the flag」(旗を掲げよ)

ヨーロッパの先進諸国は(多少のニュアンスの違いこそあれ)いちちはやく米国支持を打ち出した。我が国もまた、湾岸戦争の誇りの二の舞を踏むなどばかりに、自衛隊法その他の関係法規を改めてでも自衛隊の派遣を進めようとしている。どこでどう約束したのか、「未曾有の非常事態」を盾に、泥縄式に米国の要請に応えようとする気運がうかがえる。そこには事の本質を振り返るところか、他の選択肢を深慮する主体性もゆとりも無い。

そもそも世界の列強は、かつてアジアやアフリカの「後

進地域」や「弱小民族」をターゲットに、その「文明」を根こそぎ侵略し、支配し、弾圧し、寡奪の限りを尽くした。

彼ら「先進諸国」は、いわば遅れて来た発展途上国の収奪の上に現在の地位を築き上げてきたといつていい。その後、世界の「富める国々」はかつての被支配地域の国々に充分な贖罪と援助の手を差し伸べてきたと言えるだろうか？

我が国もかつてアジアを侵略し、暴力的に植民地化し、「自衛のための聖戦」の名の下に、自他併せて二千万を超える人民を殺戮した。その歴史的認識こそが、アジアの他の民族と共存してゆく最低限のモラルではなかったか。

「自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであつて……」憲法前文には「不戦の誓い」と共に、「国際平和・共存」の決意が宣言されている。

残念なことに、世界は依然として「富める国」と「貧しき国々」との分極化が進行し続けているように思われる。

不況の時代を、戦争によってその経済危機を乗り切つて来た米国の歴史とは裏腹に、打ち続く内戦や飢餓にさらされる絶対的に「疎外」された人びと。そうした人びとにとつて「新たな戦争」は無意味な犠牲をもたらす以外の何ものでもない。短絡的な「力の制裁」に賭ける米国の「覇権主義」は、新たな亀裂や反目や憎悪をかりたてることがあつ

ても、相互理解や平和共存を目ざす有効な手段になり得るとは到底思えない。

我が国が、真に国際貢献を果たそうとするならば、米国に追隨して直ちに軍艦を派遣することではなく、先ずもつて「貧しき不幸な人びと」のもとに、必要とされる人材と援助の手を差し伸べることはなからうか。

「現実の世界」に「ユートピア」を夢見ることは、まさしく夢物語に過ぎないのかもしれない。けれども人類が、少なくとも「平和共存」への悲願に向かつて歩んでゆこうとするならば、それこそ長くて険しい道のりを覚悟せねばならないだろう。我々の内なる偏見やドグマを乗り越えて、あらゆる宗教、あらゆる民族、あらゆる文化を、排斥するのではなく認め合うこと、そして絶対的な富の不平等をなくすよう努めること、そのための方法を考えてみようではないか。

フアナティックなナシヨナリズムの旗の下に馳せ参じるのではなく、「平和」と「共存」の二文字を追い求めている無数の人びとの苦しみに想像力を思いめぐらそう。その地点から第二、第三の道が発見できるのかもしれない。



## 自衛隊の協力支援活動の役務

種 類	内 容
補給	給水、給油、食事の提供並びにこれらに類する物品及び役務の提供
輸送	人員及び物品の輸送、輸送用資材の提供並びにこれらに類する物品及び役務の提供
修理及び整備	修理及び整備、修理及び整備用機器並びに部品及び構成品の提供並びにこれらに類する物品及び役務の提供
医療	傷病者に対する医療、衛生機具の提供並びにこれらに類する物品及び役務の提供
通信	通信設備の利用、通信機器の提供並びにこれらに類する物品及び役務の提供
空港及び港湾業務	航空機の離発着及び船舶の出入港に対する支援、積卸作業並びにこれらに類する物品及び役務の提供
基地業務	廃棄物の収集及び処理、給電並びにこれらに類する物品及び役務の提供
備考	1. 物品の提供には、武器（弾薬を含む）の提供を含まないものとする。2. 物品及び役務の提供には、戦闘作戦行動のために発進準備中航空機に対する給油及び整備を含まないものとする。

## 搜索救助活動の役務

種 類	内 容
補給	給水、給油、食事の提供並びにこれらに類する物品及び役務の提供
輸送	人員及び物品の輸送、輸送用資材の提供並びにこれらに類する物品及び役務の提供
修理及び整備	修理及び整備、修理及び整備用機器並びに部品及び構成品の提供並びにこれらに類する物品及び役務の提供
医療	傷病者に対する医療、衛生機具の提供並びにこれらに類する物品及び役務の提供
通信	通信設備の利用、通信機器の提供並びにこれらに類する物品及び役務の提供
宿泊	宿泊設備の利用、寝具の提供並びにこれらに類する物品及び役務の提供
消毒	消毒、消毒機具の提供並びにこれらに類する物品及び役務の提供
備考	1. 物品の提供には、武器（弾薬を含む）の提供を含まないものとする。2. 物品及び役務の提供には、戦闘作戦行動のために発進準備中航空機に対する給油及び整備を含まないものとする。

## 沖縄もテロの標的に

目取真 俊

世界貿易センタービルに突っ込む旅客機と崩壊するビルの映像。いろいろな角度からとらえられたその映像を、数日のうちに何十回見せられただろうか。そして、アメリカのメディアから発せられる被害の状況や犯人追及、大統領の動向などの膨大な情報を、どれだけ聞かされ、読まされたのだろうか。

それに比して、わずかばかりのイスラムやアラブ諸国側の情報も、たいがいはアメリカやイギリスのメディアを通してのものだ。テレビや新聞にあふれる情報にさらされていると、何かアメリカが一方的な被害者であり、大規模な武力による「報復」が、さも当然であるかのように思えてくる。

### 沖縄の基地への攻撃も

だが、このようなアメリカ発の情報による「すり込み」に無自覚なまま、高揚した愛国主義を背景にアフガニスタンへの軍事攻撃に出ようとしているアメリカ

の動きを肯定してしまうのは、危険きわまりない。ましてや、それに同調する形で、自衛隊による米軍基地警備や集団的自衛権の行使、有事法制の制定などを一気に進めようとしている与党の動きには、十分注意しなければならない。

今、私たちにとって大切なことは、今回の事件の歴史的・政治的背景を多様な視点から検証し、冷静に分析することを通して、テロリズムが発生する社会的要因自体を解決していくことだ。それなくして安易にアメリカの軍事攻撃に同調するなら、米軍の出撃地点であるこの沖縄も、テロの対象となっていくだろう。

実際、事件の起こる以前から、韓国や日本の米軍基地がテロの対象となっていて、米軍が警戒態勢を取っていたことが報道されている。アメリカの「報復」攻撃が実行されれば、さらにそれへの「報復」として、沖縄の基地が狙われる可能性は強まる。

### 横暴な米国一局支配

八月二十七日、ヨルダン川西岸のパレスチナ自治区で、パレスチナ解放機構(PLO)ナンバー2で、パレ

スチナ解放人民戦線(PFLP)議長であるアブアリ・ムスタファが、イスラエル軍に殺害された。PFLPの事務所に武装ヘリでミサイルを撃ち込み、政治指導者を暗殺するイスラエルやそれを支援するアメリカに対して、アラブ諸国が反発を強めるのは当然であり、イスラム系の活動組織をさらにテロ活動に走らせることになっている。

今回の事件の背景にいろといわれているウサマ・ビンラディンにしても、アメリカからすれば悪の権化かもしれないが、パレスチナ解放勢力や反イスラエル勢力、アメリカの一局的な世界支配に反発を強めている国や組織からすれば英雄扱いだろう。実際、数千名の民間人の死者を出したことは反対するが、政治・経済・軍事とあらゆる面で一局支配を強め、横暴さを見せているアメリカに打撃を与えたことへ心情的な共感を寄せるものは、世界的に見れば多いのではないか。

### 沖縄も「標的」に

イラクや旧ユーゴスラビアで、アメリカ主導の多国籍軍やNATO軍の発射するミサイルが、ピンポイント

ト攻撃で「敵」の施設を破壊する。アメリカ国民や私たち「先進国」の人間は、コンピュータのシミュレーションゲームのようなその映像を、何の痛みもなく眺めている。しかし、破壊される施設やその周辺には、まぎれもなく多くの人びとの死がある。

しかし死ぬのは攻撃された側の人たちであり、紛争地域から遠く離れた先進国の人間は、自分たちの生活地域が戦争に巻き込まれることはない。

今回の事件は、そのように思っていたアメリカ国民に、自分たちもピンポイント攻撃の対象であり、アメリカも「戦場」となることを知らしめた。

アメリカだけではない。沖縄も一緒なのだ。

今回の事件で「十五年使用期限問題」も消し飛んだ。これから先、経済的利益追求のために基地の「県内移設」を進めることは、米軍が起こす事件や事故だけでなく、国際的なテロという新たな危険を背負うことになる。その覚悟はあるか。

(めどるま・しゅん 作家)

『琉球新報』二〇〇一年九月二〇日から

たけのぶ み え こ  
竹信 三恵子

(朝日新聞記者)

早朝、東京からの電話でたたき起こされた。寝ぼけている耳に、「飛行機がペンタゴンにつこんで炎上している。談話があつたら送つてくれ」という上司の声が飛び込んできた。サンフランシスコ条約五〇周年を記念した日米親善使節団に同行して西海岸・サンディエゴのホテルに滞在中、同時多発テロが起きた。現場の東海岸からは大陸ひとつ超えた場所で、取材といっても戸惑うばかりだ。現地で知り合つた大学人や企業人に電話した。だれの声も震えている。空港が封鎖され、盛り場も一斉に閉鎖され、公的な建物には半旗が掲げられた。わずか一日で、街は戒厳令のようになっていた。一週間足止めになり、その間、さまざまな人との問題について話し合う機会ができた。印象的だったのはCNNなどの全国テレビでの声高な報復要求と、事件直後の一般の人々の声との落差だった。

サンディエゴは十を超す総合大学・短大がひしめく教育の街でもある。そのひとつサンディエゴ大学では、事件の翌日、いち早く教員による「テロリズムと寛容」と題したシンポジウムが開かれた。

テレビは奇襲への連想から「事件は真珠湾攻撃の再来」と繰り返していた。パネリストの一人はこれにふれ、「真珠湾攻撃は日本によるものだが、日本人一人一人は善良な市民」と発言した。「よそことだった戦争被害を、初めて自国の痛みとして受けとめる機会を持った」との発言もあった。暴力の連鎖に歯止めをかけるため、人々の多様性や他者への共感に注目しようとの呼びかけだ。

足止めに同情して、地元の人々が連日、夕食に招いてくれた。その一人で「これは戦争だ」という「主流派」的意見の六〇代の白人女性も「アラブ系や日系市民への影響が心配。日系人の知り合いには、あなたには関係がないこと、と励ましたのよ」とつけ加えた。地元紙も事件の四日後にアラブ系市民への嫌がらせを大きく取り上げ、同時に励ましや花束が届いていることも報じた。市内の追悼ミサでは、イスラム教徒とみられるスカーフ姿の女性がカトリックの人々の横で折っていた。一方、日本人留学生によると、大学内のクラス討論会では好戦的な意見が相次いだ。パレスチナの子供が事件

を喜ぶニュース映像をとりあげ「こんな人々は遺伝子から改造すべきだ」という極論まで出たという。確かにだれもが衝撃を受け、報復はやむをえないというムードにはなっていた。だが同時に、暴力はイヤだという気分や、知り合いのマイノリティ市民がひどい目にあわなければいいが、との不安がそのかげで揺らめいていた。しかし、ニュース映像が繰り返されるうちに、星条旗がどの窓にも掲げられるようになり、広場では国歌の演奏に拍手がわくようになった。

米国は多様な国の出身者を内側に抱え込む「ノアの方舟」だ。「方舟」の中の意識が「あらゆる国の人々を抱えるこの国を守ることこそが世界を守ること」という方向に向かえば、好戦論に振れる。異文化の隣人への想像力に向かえば、好戦論の抑制につながる。こうした揺らぎを切り捨て、「報復」の世論へとまとめあげていったのは、全米ネットのテレビだったのではないか。パレスチナの子供の映像ひとつとっても、その人たちが味わった体験を十分説明せずに「喜ぶ」映像を繰り返せば「人の不幸を喜ぶ異常な人々」に見える。事件の起こる前、ディズニーの真珠湾についての映画を見たという日系人が、「米国は広い。ナマの人間同士の交流がないままハリウッドがイメージをつくりあげていく」とまゆをひそめていたことを思い出す。最大公約数へと人々を流しこんでいくマスメディアと、個々の人間への想像力を呼び起こそうとする小さな努力の綱引きが米国のあちこちで見られた。

帰国後、日本のパソコンネットをのぞいた。アフガン系米国女性の大統領への嘆願書や反戦署名など、「威勢のいいカウボーイ」ばかりではない米国を紹介しようとする日本人たちの情報交換のメールが、数百通たまっていた。朝鮮民主主義人民共和国との関係が緊張するたびに少女のチマチョゴリが切り裂かれる日本でも、多様性に敏感な目を養う必要が認識されてきたのかもしれない。人間のレッテル張りを防ぎ、互いの顔の見える情報ルートをいかに広げるか。また、これをすくいあげるシステムをマスメディアがどうつくるか。メディア業界に身を置く立場として、課題の重さを痛感している。

# 語りかけたいあなたへ 39

大里知子

## ダイエット

六月下旬からダイエットを始めた。

夏に向かって、素敵な服を着る予定があるとか、海へ行くのでお気に入りの水着を身につけるといふわけでもない。私が始めたダイエットの動機は、そんな楽しいことや浮ついたものではない。もつとずっと深刻な理由から始めたのである。

私の体重が目に見えて増え始めたのはここの二年のことで、車いすから移動する時は、二人の人に抱きかかえてもらって移動する。その移動のたびに、重そうな気配が私に感じられるようになって、「これではいけない」と、ダイエットを真剣に考えるようになった。一口に痩せるといっても、私の場合、車いすに座っているか、身体を横たえているかのどちらかなのだから、身体を動かして減量するのは不可能。

どうしたらいいかと考えた結果、私にもできる体重を減らす方法があった。

それは、食べるものを減らすこと。食べ物減らすといっても、私は間食をほとんどしないの

で、おやつを減らすことはできない。それでは何を減らそうか。

昼食はヨーグルトぐらいで軽くすませているので、主食を減らすしかなく、夕食のお米のご飯を食べないことに決めた。私は、もともと食べ物にあまり執着しないたちで、「食べなきゃ生きられないから食べるか」といったように、食生活にはきわめて単純なことしか思っていない。でも、子どもの頃から食事は、麺類やパンよりお米のご飯が好きな方なので、私としては大変な決心で実行に移したのだった。

あまり減量のことばかり考えて、ただでも身体に力が入らなくなってきたのに、この上まですます体力がなくなったら、これもまた大変なことだと思うし、私はこれからも生きなければいけない。生きるからには少しでも快適に暮らしていかなければいけないと、いつも考えてきたので、ダイエットと簡単にいつても、並大抵のことではないということが痛切にわかった。

男性、女性とも、中年以上になれば、ホルモンのバランスが崩れてみんな肥満気味になってくる。私もこういうことで太るのだったら、減量する意味がないかもしれない。

いずれにしても、もう少し結果を待つことにしたい。

悪いことは重なるもので、私は車いすをリクライニングにしているから身体が斜めになってくる。身体を斜めにしてしまうと、どうしてもおなかのところが必要以上に大きく見えてしまつて、会う人会う人に「太りましたね」とか「太ったんじゃない？」と言われる。

人の話を聞くと、ダイエットをしてから三か月くらいいしないと効果は現われないという。はたして私のダイエットは九月末に効果が現われてくるだろうか。

★大里知子さんのEメールアドレス＝fusen@abeam.ocn.ne.jp

## DV防止法、十月十三日から施行

配偶者からの暴力に苦しむ多くの女性たちの要望を受けて成立した『配偶者からの暴力防止及び被害者の保護に関する法律』が十月十三日から施行される。今年四月二日、議員立法、四日参議院本会議、六日衆議院本会議という超スピード審議で可決・成立したこの法律は、

- ① 配偶者暴力相談支援センターを書く都道府県に新設。
- ② 通報制度（暴力を受けている者を発見した者は、上記①か警察に通報。通報を受けた者は適切な措置をとらなければならない。

- ③ 保護命令（裁判所は被害者の申し立てによって、加害者に六か月の接近禁止、家から二週間退去を命令でき、違反すれば百万円以下の罰金）などを制度化したもの。

保護命令が身体的暴力に限られ、範囲が狭い、相談窓口がいまい、相談員の数も資質も不十分など、問題点は数々あるが、口にするのをはばかられていたDV（ドメスティック・

バイオレンス）が一般化しただけでも影響は大きい。現実の運用を通して発生した問題点は、また女性たちで問題提起し、よりよい制度をつくりあげたい。

## テロ対策特措法・自衛隊法改正に強い反発

政府は、一〇月五日、米国の軍事行動を自衛隊が支援するための、「テロ対策特別措置法案」と「自衛隊法改正案」を閣議決定し、国会に提出した。自衛隊の活動範囲を拡大し、武器使用基準の緩和を緩和することを目的とするこの法案（四九頁参照）は、戦後日本の安全保障政策を根本から転換し、憲法九条の放棄につながる。

国会内の対抗勢力は小さく、このままでは特措法が成立しそうな勢い。市民の反対運動は、全国で連日展開されている。

一五〇人を超える全国の憲法学者も、一〇月九日、「テロ行為は国際犯罪として処罰すべきで報復戦争は国際法違



反。テロ対策法案は自衛隊の参戦法であり、憲法の基本原則に反する」などの緊急共同アピール (<http://www.jca.org/~kenpoweb/appeal.html>) を出した。

## またしても沖縄に大きな負担

「米空母キティホーク」の出撃に伴い、極東最大の空母基地といわれる沖縄の嘉手納基地に、九月十九日、MC-130特殊作戦機が緊急着陸。パラシュートを背負い、ヘルメットを脇に抱えた特殊部隊とみられる兵士が降り立った。また、長距離の作戦行動を可能にする空中給油機KC10が本土から飛来し、海兵隊所属の垂直離着陸機ハリアーが実弾を装着して訓練を始めた。

さらに、米国のアフガニスタンへの空爆開始を受けて、在日米軍の七割を超える施設が集中する沖縄県に、「周辺警備の応援」を理由に、湾岸戦争を二〇人上回る約四二〇人の機動隊員が派遣された。この派遣に、自衛隊機が利用されたが、これは初めてのこと。沖縄平和運動センターの岸本喬事務局長は、これを、テロ対策特措法や自衛隊法改正への地ならしと憂慮。

## 田中元首相の日本に参戦への反対運動

日本国内のさまざまな個人や市民団体による反対運動は湾岸戦争の時以上に燃えている。

「戦争と女性への暴力」日本ネットワーク(VAWW-NEETジャパン)は、九月十七日、グローバルな戦争にグローバルな連帯で抵抗しましょう」との緊急アピールを呼びかけ、二〇〇〇名の署名を添えて全世界に発信、大きな反響があった。

〈平和遺族会全国連絡会〉をはじめとする首都圏の各平和遺族会は、九月二十七日、国会議事道前でのリレー演説会。その後、各グループによる要請文を内閣府に提出。

〈日本母親大会実行委員会〉は、一〇月八日、「アメリカのアフガニスタン攻撃の中止を求め、日本政府の戦争加担に反対します」と、米国のブッシュ大統領、小泉純一郎首相、各省庁大臣等、四八団体へ送付。

一〇月十二日には、〈平和・民主・革新の日本をめざす全国会(全国革新懇)〉が、江尻美穂子、落合恵子、木下順二、小林カツ代、徳光和夫、樋口陽一、本多勝一氏ら五〇名の名で、「テロと軍事報復に反対・日本政府に憲法九条のもとづく行動を」求めるアピールを呼びかけた。

〈第九条の会・オーバー東京〉は、「第九条が危ない―緊急集会」を一〇月十三日に開催。阿部政雄、金子勝両氏の話を聞いた。

## 米国の報復戦争に、米国内で反戦の声

テロ事件（二〇〇一年九月一一日）を受け、報復の「軍事行動に賛成」が九割近くに迫る米国社会の中でも、反戦を訴える個人や組織もある。九月二日、午後九時すぎ、マンハッタンのタイムズスクエア周辺に、若者たち数百人が集まり、プラカードを掲げ、「世界貿易センタービルで亡くなった人々の死を、戦争で汚すな」と叫んだ。

米国下院・カリフォルニア州選出の民主党の女性議員、バーバラ・リーさんは、ただひとり、議会で軍事報復に反対を表明した。リーさんは、九八年のイラク空爆、九九年のコソボへの部隊派遣のどちらにも反対してきた議員である。インターネット上でも、反対運動が展開されているが、そのひとつに、ブッシュ大統領に「テロリズムに対する非暴力的対応」を求める「若者の国際的宣言」というのがあり（<http://www.9-11peace.org/youth.php3>）。ここには、世界の「四一万人を代表する一三八団体」が名前を並べている。

## 男女共同参画の〈BOCシニア〉始動

（あこら）は、スタート時点から「男女共同参画」をうたってきたが、〈女性の創造力の銀行〉として、女性の職業的進出と地位の確立を目指してきた〈BOC〉は、「女は無能」とされていた当時の「公序良俗」へのチャレンジ（女こそ男以上の仕事ができる）が眼目でもあったため、男性を入れることには抵抗がありました。しかし、高齢化社会の今日、高齢者が男女を問わず「高齢」であることを理由に、求人からも排除されていることに問題を感じ、このほど、男女共同参画の〈BOCシニア〉を呼びかけ、八月一八日、第一回の集まりを持ちました。

▽高齢者ならではの仕事を創造し、高齢者も「税金を払う存在」にする。

▽仕事の開発は各自が努力をする。

▽監事は持ち回りとする。

▽例会は毎月の七のつく日（土・日・祝祭日はその前後）の午後六時から二時間程度。

▽会費は月額五百円。

▽連絡先はBOC

（千一六〇・〇〇二一 東京都新宿区新宿一・九・四 TEL 〇三・

三三四・三九四一、FAX 三三四・九〇一四

を決定、さっそく創業活動に入りました。今まで数回の会議を重ねましたが、さすが熟練者ならではの名案が続出。具体的な計画が、まもなく実行段階に入ります。談論風発、楽しい会です。参加ご希望の方は、前記にご連絡を。

### 能の観世榮夫・朝鮮の老女を舞う

日本植民地政策の強制連行をテーマに、多田富雄が書いた新作能『望恨歌』が、九月二十九日、能役者の観世榮夫によって、国立能楽堂で演じられた。

観世氏の演じたシテは、強制的に九州に連行され、異国での死を強いられた朝鮮の青年(李東人)の妻で、帰らぬ夫を思い続け、七〇路を越えている老女。

朝鮮人労働者の遺骨を弔った寺の僧が、李東人の遺書を老女に届けると、老女は「アア、イゼネ、マンナンネ」(あももう一度お会いしましたね)、と泣き崩れる。朝鮮語の謡は、能舞台ではもちろん空前。老女の万感の想いを込めた舞と謡は、観客の心を深く打ち、能楽堂は緊張に満ちた静けさに支配された。

### 国立市議会、自・公・民が女性市長に反発

十一月に任期が切れる二人の教育委員の人事をめぐって、全国初の女性市長である上原公子市長は、歴史事実の認識に問題が多い扶桑社の「新しい歴史教科書」を推薦していた委員を交代させる人事案を提出していた。教育委員の選任権は、法律で市長の権限と決まっているので、これは妥当なことであった。

しかし、これに反対する自民・公明・民主クラブが、この撤回を求め、審議拒否をし続けたため、結局、九月の定例議会が全く開けないという異例の事態を生んでいる。

### 〔追悼〕

島田とみ子氏(八月一〇日、享年七四歳)

東海大学名誉客員教授、元朝日新聞記者、社会保障制度研究者。

高原とみ子氏(八月一九日、享年六八歳)

毎日新聞記者を経て、八九年経済企画庁長官、九三年日本体育協会部の女性会長、九五年フィンランド大使、一九九八〜二〇〇〇年セントラル・リーグ会長と、「女性初」の要職を歴任。



## 反戦の思い深く 第四七回母親大会

第四七回日本母親大会(実行委員長・木村康子氏)は、八月二五、二六両日、滋賀県で開かれ、二万一六〇〇人が参加、初日は、草津市の立命館大学キャンパスで、女性の地位向上など、五四の分科会や特別講演が行われ、加藤周二氏の講演会や、沖繩の反戦運動でも知られる元米国海兵隊員、アレン・ネルソンさんと、旧ソ連の核実験被爆者、レナータ・イズマイロワさんなどの国際シンポジウムは、あふれるほどの参加者。

二日目は、長浜市の長浜ドームで井上ひさし氏の講演、「憲法が生きる二二世紀を——愛・平和」。二〇世紀の男たちの負の財産、核兵器などを、憲法九条をベースに解消していくこうと強く訴え、深い感動に包まれた。

## 「報復戦争」に女性が反対の声

いち早く「米国の報復戦争、絶対支援」を打ち出した小泉首

相に、女性たちは、すかさず反発。九月二五日、有楽町マリオン前で、土井たか子、川田悦子、吉武輝子、斎藤千代らが反対のスピーチ。

二七日には衆議院第二議員会館で、超党派女性議員と女性団体が「止めようテロと軍事報復」をテーマに緊急集会。「軍事報復・自衛隊派遣は、果てしない武力の応酬となる。テロの原因を除いてこそ平和は生まれる。平和憲法を守る国として独自の路線を」と、それぞれの思いを述べ、行動開始を誓い合った。

## 「世界女性文化会議・京都二〇〇一」

九月二三日、国立京都国際会館で、(日本エンター学会)が、「平和・平等・男女共同参画の新世紀をめざして」をテーマに開催した。基調報告は、インガー・ブリュッゲマン国際家庭計画連盟事務局長による「グローバルゼーションと女性の人權」で、「男女共同参画社会基本法を制定した日本は、世界のモデルとなる」と発言。日本国憲法にある「男女平等(二四条)」とともに、この「基本法」が実質的に機能することが、二一世紀における日本社会の最優先課題であると強調した。

パネリストのひとり、土井たか子衆議院議員(社民党)は、

「女性が本気になったら政治は変わる」と、内閣府の世論調査で六五%もの賛成を得た「選択的夫婦別姓」の民法改正案を、超党派で国会に提出する具体的な政策を表明した。

## VAWW・NETジャパンの

### 「NHK裁判」を考える

NHK教育テレビで放送されたETV二〇〇一「シリーズ戦争をどう裁くのか」の第二回「問われる戦時性暴力」が放送直前に改ざんされた問題で、この番組の中心となるはずだった「女性国際戦犯法廷」の主催団体であるVAWW・NETジャパン(代表 松井やより、副代表 西野瑠美子)が、番組改ざんの事実を明るみに出し、番組検閲の構造の不当性を明らかにすべく、NHK、NHKエンタープライズ21、ドキュメンタリー・ジャパンを相手どり、「信頼(期待)利益の侵害」「説明義務違反」を問う訴訟を、七月二四日、東京地裁に提訴した。

その第一回公判を受けた一〇月三日、ヘメディアの危機を訴える市民ネットワーク主催により、東京ウィメンズプラザで、裁判の報告会と討論会を開催。約一〇〇人が参加。

松井・西野両原告は、番組作りに協力してきた経過と、陳述書を読み上げ、野原仁・城西国際大学講師が、ジャー

ナリズムの倫理とNHKの欺瞞性などの問題提起を行なったのち、討論に入ったが、長期戦が予想される裁判に、会場は熱気に包まれた。

## 「アフガンの獅子」マスード、追悼の集い

九月二一、二二両日、小平市の松明堂ギャラリーで、写真家の長倉洋海氏は、自爆テロによつて命を断たれたアハマッド・シャー・マスードを哀悼する集いを開いた。マスードの突然の死を悲しむ人たちが、両日とも会場はいっぱいであった。一九五二年アフガニスタン・パンシール溪谷に生まれたマスードは、七八年、二八人の仲間と共に武装蜂起、アフガンの独立と平和のために戦うが、二〇〇一年九月九日、ジャーナリストを装ったテロに倒された。

長倉氏は、マスードと一九八三年春に会つて以来、親交を結び、アフガンの状況と、マスードの活躍を日本に紹介してきた。

〈あごろ〉では、連続学習会「テロと日本の危機Ⅱ」として、十月二四日、長倉氏を招き、スライド・トーク「マスードとタリバーン」を四ツ谷地域センター(地下鉄丸の内線「新宿御苑前」から四谷方面へ徒歩三分)で開く。参加費は千円。申し込みは〈あごろ〉へ。

『権力状況の中の人間』

——平和・記憶・民主主義——

石田 雄 著

影書房刊

「重要なことは、権力の中心から離れ、疎外された立場にある人たちが、権力状況を自分の力で変えることが出来るものとしてとらえ、変えようとする意思を持つことである。人間の尊厳がより尊重されるような社会を次の世代に残すためには、権力状況の中で疎外されている人たちの声が影響を持ち得るように状況を変えなければならない」（本書「はじめに」より）。

冷戦体制の崩壊から九〇年代を通して、アジア諸国を中心とした国際社会から日本の戦争責任、戦後責任が厳しく問われるなか、日本の言論状況は大きく右旋回し、反動への対抗勢力からは少なからぬ転向・変節者が続出した。

学徒動員時に敗戦をむかえ、戦後民主主義とともに戦後を歩んできた著者の目に、この無残な姿を露呈させている現状はどのように映るだろうか。

一九二三年生まれの著名な政治学者である著者は、市民運動にも積極的に関わりつつ、一貫して「疎外された立場にある人たち」「最も恵まれない地位にいる人たち」の側に足場をおき、現状変革のための発言をつづけてきた。

本書は八〇年代後半から二〇〇一年にかけて、平和憲法、戦争責任・戦後補償、良心的兵役拒否、集合的記憶やナシヨナリズム、住民投票といった諸問題について書かれた論文・講演・対談・エッセイ・最新の書評などによって編まれたユニークな書である。自身であまり語ってこなかったという自らの軍隊での経験や戦後の出発、あゆみについても、対談のなかで語られていて興味深い。

幅広い視野と豊富な経験に裏打ちされた碩学の論考から、私たちは多くのことを学ぶことができるが、何よりもそのゆるぎのない足場、そこを基軸に厳しく自分自身をも問い直すことのできる自己批判力、絶望的な状況下にあっても変革への可能性を模索しつづける姿勢などからもまた、私たちは人間としての基本的なものを学ばなければならぬのではないかと強く思った。（M）

（西六判 三三四頁 定価三五〇〇円＋消費税）  
二〇〇一年七月刊

『いかそう日本国憲法』

——第九条を中心に——

奥平 康弘 著

岩波ジュニア新書

憲法を「物語」としてとらえ直すというユニークな試み、それが本書の特徴である。私たち個々人は、自己の納得のゆく生き方を追求するために、それぞれが自分に固有な「いい物語」を作っていこ

うとしている。それと同じように、私たち国民は、憲法を「いい物語」に仕立てることができるのではないか……。そして、「いい物語」の核心は、憲法第九条をどう「いかすか」、という点にある。

この「物語」の主人公は、国家主権者としての、わたしたちひとりひとりである。その主人公が、平和条項の歴史と意義を学びながら、現実の国際政治で第九条の真価を発揮させ、「憲法物語」を未来に向けて、豊かに語りつづけていくことが求められている。

また、「物語」の創造、それは、「国際化」の名のもとで、「憲法」を相対化することではない。一九九〇年代になって流布し始めた「国際貢献」ということばや、「常任理事国入り」「国連中心主義」、湾岸戦争時の自衛隊の海外派兵、特定の大国の利害による「国連」の独占。こうした、一見きらびやかな「国際化」(その実は

米国化だが)の波、これにどう対処すべきか。本書では、「自国軍派兵部隊」ではない「個人単位の志願兵制度」による「国連軍」の設置、国家レベルで「良心的兵役忌避」等を提言。あくまでも、憲法九条を軸にどう生きるか、そうした個人が求められている。

(H)

(新書版 二一五頁 六五〇円 一九九四年四月刊)

## 『フォト・ジャーナリストの眼』

長倉洋海著

岩波新書

本書は、著名な写真家・長倉洋海氏が、いかにして「自分の視点」を獲得していき、フォト・ジャーナリストになったかが巧みな文章で綴られている。力のある写真もたくさん載っていて、実に説得的である。

その道程は、「十二年にわたる紛争地の旅」の記録であり、読者を圧倒する。長倉氏が自身の原点とするエル・サルバドルの戦場から始まり

(一九八二〜九〇年)、アフガニスタンでの、卓越したイスラム解放戦士・マスードとの二五〇日。一九八六年以降、歴史のあらゆる底流を垣間見せるフィリピン。そして、フィリピン出稼ぎ労働者を追って日本へ。また、バブル経済の実態を示す、台東区「山谷」の日雇い労働者の世界、いわば、「もうひとつの日本」である。最後に、難民大量虐殺が頻発するパレスチナの地、「魂をスタスタに切り裂くような悲しみの現場」。長倉氏は、そのようなぎりぎりの現場で、写真を撮ることの意味を問い続けている。

この本を読むと、長倉氏の写す、歴史の底流を生きた難民キャンプの母親と子どもたち、アフガニスタンの戦士たち、日雇い労働者らが、なぜあのように心に響くのか、少しかかったように思える。

(H)

(新書版 二四四頁 七八〇円 一九九二年四月刊)

◆あごらの皆様、お変わりなく、こかつやくのこととぞんじます。

今年は、東京地方はかなりのお暑さのようでしたね。その反対にこちらでは、お盆を過ぎてから夏らしい暑さになりました。

何時も『あごら』に、私のエッセーを掲載していただき、ありがとうございます。家にばかり居るものですから、心に浮かんだことしかつづれなくてすみません。でも、何もしていないよりは、よいかとおもっています。

手が動くあいだは、つづけるつもりです。季節の変わり目ですから、お身体

お大切になさってください。

(九月五日夜、秋田 大里知子)

『お詫び』知子さんはEメールをマスター、そのアドレスを知らせて下さいましたが、先月号で間違えて掲載しました。

正しくはfusen@abeam.ocn.ne.jpです。深くお詫びして訂正します。

◆二六九号、たくさんありがとうございます。

政治に関わるというのは、本当に「しんどい」仕事です。特に日本において、女性として、反自民、反保守として、今、大変さばさばとしてはいますが、世の中ほとんどおかしくなる。「ふつうの人の考え」をじっくり学び、次なる「政治的行動」を考えています。

(新潟市 内田洵子)

◆お元気ででしょうか？ このたびは大変お世話になりました。

四か月間の東京での生活は、全てが私にとつては大変新鮮で、好奇心を満たしてくれるものでした。デモをかける対象でしかなかった国会の中で、た

くさんのものを見ることができ、大臣や官僚と十分に渡り合うこともできました。幸い、厚生労働委員会に所属することができたので、これまでの生活そのものを国会という場に持ち込むことができました。選挙戦も、全くのボランティア選挙で、あの暑い中、よくも皆さん、毎日朝から晩までやってくださったものと、ただただ感謝あるのみです。電話やメールや公選ハガキなどそれぞれの方法で、一票一票とついでついでだった結果が、あの一六七、五六六票となり、供託金が戻ってくることになったのでした。カンパもたくさん頂きました。

そんな中でできた絆を大切に、東京でも新潟でも、必要なことに取り組む覚悟でいます。国会報告を聞いてくださる方があれば、どこにでも手弁当で出かけていくつもりです。



また、WINWINという元文部大臣赤松良子さんが代表の「女性を議員に」の応援団があります。私も今回大変助けていただきました。入会金一万円の会です。入ってください方には詳細を送ります。

「黒沢秩子さん連絡先」〒949-7302

新潟県南魚沼郡大和町浦佐五四二八

TEL:0257-77-2187 FAX:3422

E-Mail: kuroiwa@nmc.biglobe.ne.jp

(新潟県南魚沼郡 黒沢秩子)

\*

◆三共株式会社ヘルスケア事業部仙台営業所を退職いたしました。

思い返せば三十年四か月の年月、一瞬のことのようでもあります。やりがいをもって、夢中に過ごせたことを、心から感謝し幸せに思っております。

ほんとうにいろいろな勉強をさせていただきました。過渡期の三共で、結婚、出産後も女性が働き続けられる環境づくりのため、たたき台になると

いう冒険にもチャレンジでき、この間、組合活動が女性にも定着し、一九八五年の均等法を、余裕をもって迎えられましたことは、ひとえに皆様のおかげであつたと、しみじみと感謝の思いで胸を熱くしております。

現場では、会議、研修、何でも男女の別なく全員でできましたし、CP資料作製等も、自分の裁量ででき、評価を得、多忙でしたが、誇りをもって、振り返ることができますことは、本当に幸せなことでした。

《女性の社会的地位の問題》は私にとつても終生のテーマであり続けるはずですが、まだまだ道半ばです。

今後ともどうかよろしく御指導のほど、お願い申し上げます。

(仙台市 牧尾優香子)

\*

『記録―少女たちの勤労動員』  
を読んで

◆妹と亡妻は昭和二〇年名古屋三菱

航空機製作所で、死線を越えて生還しました。当時、長野県立伊那高女の生徒でした。昭和四四年に、その時の三三回生の『いのちあげて』の編集と、資料としての日記を、妻、梅垣久子が担当し、私は裏方をしました。

今回、地元郷土誌『伊那路』に、その日記の経緯と補足と、当時語られなかった裏話等を投稿しました。これを執筆するについて、妹三沢和子が、その本を所有していて、紹介されたので、直送をお願いし、本日、一気に通読いたしました。

昭和一九二〇年に一五歳の少女たちが、全国で動員され、多くの犠牲者を出し、その、なまなましい手記を拝読し、万感胸に迫ります。小生は第五期予備学生で、昭和二〇年五月まで、横須賀・館山海軍砲術学校で訓練を受け、後、下北の大湊軍港で、連日の対空戦闘と陣地構築に明け暮れましたが、彼女たちはそれに勝るよう

な苦難を体験され、今更のように、無謀な大戦を憎悪します。

私は、戦争のことを考えるのが嫌で、三〇余年、戦時の事は考えませんでしたが、亡友たちの夢をみるようになり、

その後は鎮魂のため関係のあった所へ行き、やはり戦いを嫌った妻の日記を出してみても、一部の軍部とその帝国主義を発掘し、何も知らずに駆り出された人々の苦悩を表に出すことが平和を守るのに最も大切な方途だと痛感します。趣味で地方史等を書いておられますので、貴書をまとめるのに大変な努力がいったことを知ることができません。生存者への励みと、後世への戒めのためにも、一層のご活躍をご期待申し上げます。御礼かたがた感想まで。

(長野・伊那市 平出利男)

\*

### 【お詫び】

◆先月号で「ネコの手募集」のお願いを出しましたところ、「ボランティアで

来て下さる方に、あまりにも失礼ではないか」と、抗議のお電話を頂きました。たしかに配慮が足りませんでした。深くお詫びします。

実は、「ただの募集では目立たない。キャッチフレーズを『ネコの手募集』にして、ネコの絵でも入れたら」というアイデアを出して下さった方があり、何か前に掲載したところ、「ネコの手なら、私でもお役に立つかもしれないね」と、申し出て下さった方が何人かあり、たいそう助かりましたので、「柳の下の何とか」で、第二弾を出した次第でした。

人権について、改めて考えさせられました。ご注意下さった方に厚く御礼申し上げます。(事務局)

\*

### 【次号も「テロと日本の危機」を】

◆(へいごらUSA)責任者の今野望さんは、目の前のビルから崩壊の瞬間をご覧になった由。「原稿を書きたい」と

のお話でしたが、カウンセラーの身。次から次に患者さんが殺到し、この号には残念ながら間に合いませんでした。しかし、その患者さんたちの病状が刻々と変わっていく姿に、医学と心理学の両方の勉強をしてきた身として学ぶことも多く、ぜひとも書いておきたいというお話。おちついたら連載で書いて下さるそうです。同じニューヨークの大石さんは、急なことでしたが、一晩で原稿を書いて下さいました。大石さんも連載して下さいそうです。世界の女性たちと手を結んで、アフガニスタンの戦火を、一日も早く終わらせたいと願っています。

### ◆「テロと日本の危機」(Ⅰ)(Ⅱ)ともに、

活動の資料にお役立て下さい。会員の方には、追加分は一部三〇〇円でお頒けします。同封の振替用紙でお申し込み下さい。送料はサードビスします。『へいごら』は、戦争抑止の「紙の爆弾」のつもりでつくっています。カンパも頂ければ幸いです。

〈あごら〉は、人と人が出会つひろば――

思い悩んだとき、もつと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……。心おきなく話し合える仲間がいる……。そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あごら」を軸に、よりよい自分と社会を目指す、ゆるやかな連帯。「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

会費は月刊「あごら」の誌代込みで月額七百円。一年分前払いが原則ですが、ご相談に応じます。入会金は二千円。ハガキかFAX、電話を頂ければ、申し込みカードをお送りします。

〈BOCC〉の登録も、どうぞ……

一九八〇年に生まれた〈BOCCバンク・オブ・クリエイティブティ〉は、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご連絡ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！ ただし、半年以上〈あごら〉会員の方に限ります。

# 連絡先

どちらも〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-9-4 中公ビル  
☎03-3354-3941(代) FAX03-3354-9014  
Eメール XLV05467@nifty.com

あごら 270号 テロと日本の危機Ⅰ ●発行2001年10月10日

●編集 あごら新宿

●発行所 あごら編集部 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-9-4

●TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com

●定価 本体643円+税 ●振替 00100-0-5264



9784893061171



1920036006434

ISBN4-89306-117-8

C0036 ¥643E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体643円+税

企画・編集・翻訳…

何でもご相談ください

創業1960年—

女性専門職集団

BOC

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354・3941 FAX3354・9014

E・mail XLV05467@nifty.ne.jp.

NPOウイン女性企画

〒460-0008 名古屋市中区栄3-28-2

☎052-251-9109 FAX261-8778

# 見えない戦争

第2回ブロンズ賞受賞

斎藤千代 著

四六版 352ページ

1785円送料サービス

斎藤千代

私が訪ねた戦後の湾岸／イラク・パレスチナ・イスラエル……

## 見えない戦争



# 湾岸戦争の真実を追求！ 今こそ必読の書

## テロと日本の危機 I, II

271号も、引続きこのテーマを追います。活動資料にぜひご活用ください。

〈連続学習会〉(会場は、東京、四谷地域センター。問合せ03-3354・3941)

- |                  |       |              |
|------------------|-------|--------------|
| I 憲法があぶない        | 奥平康弘氏 | 10月19日(金) 6時 |
| II マスードとタリバーン    | 長倉洋海氏 | 10月24日(水) 6時 |
| III イスラーム世界とテロ   | 酒井啓子氏 | 11月中旬(予定)    |
| IV 難民ボランティアの現場から | 永井真理氏 | 11月下旬(予定)    |